

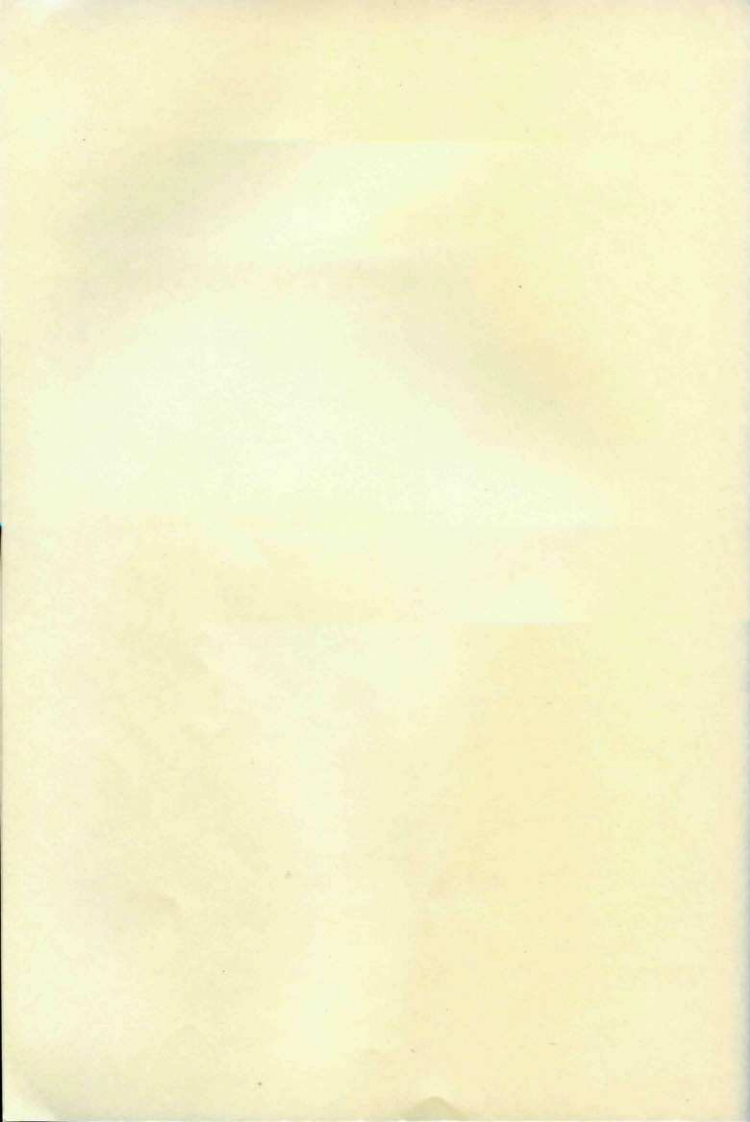
長野原町埋蔵文化財調査報告 第20集

林中原 I 遺跡 IV

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

2010

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



はやし なか はら いち い せき
林中原 I 遺跡 IV

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

2010

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



林地区航空写真（上が北、矢印が調査地点 平成8年10月撮影） 国土交通省八ッ場ダム工事事務所提供



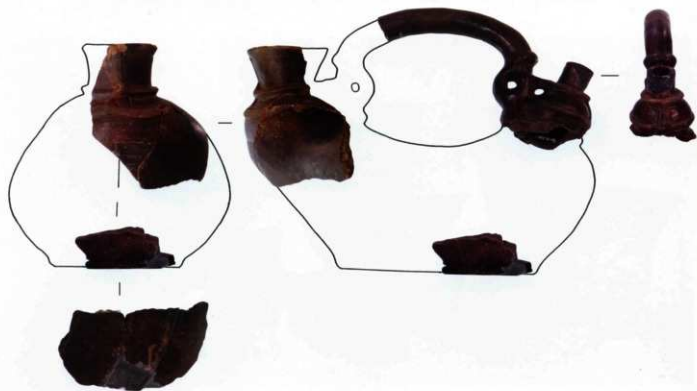
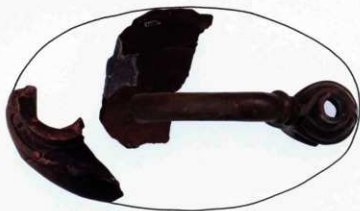
S101出土一括廃棄土器（堀之内2式）



注口部出土状況



注口部接合状況



釣手付き注口土器

序 文

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明3年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

林中原Ⅰ遺跡はこれまでの発掘調査で、南側に中近世城郭である林城跡があり、北側には縄文時代前期から後期に至る集落があることが知られています。なかでも、縄文時代後期については、町内でも最大級の集落跡が存在するものと推定されています。今回報告する第4次調査は、個人専用住宅建設に伴う調査であります。調査面積は狭小でしたが住居跡と配石遺構等が発見され、また住居内に多量の土器・石器等が廃棄されている状況が確認されました。その中には釣手付き注口土器など珍しく貴重な資料を得ることができました。本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって各方面から多大なるご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

長野原町教育委員会

教育長 黒岩文夫

例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字中原に所在する林中原Ⅰ遺跡（4次）の発掘調査報告書である。
2. 調査は個人専用住宅建設に伴う事前調査として、原因者の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、文化財補助事業として、国宝重要文化財等保存整備補助金・群馬県文化財保存事業補助金・町費が充てられた。
4. 調査は発掘調査を平成15年7月11日から7月18日迄、整理調査及び報告書作成を平成15年8月11日から平成22年3月19日迄の期間実施した。

5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。
編集・執筆：富田 遺構・遺物写真撮影：富田・佐々木忍 遺物実測・トレース：富田
図版および写真図版作成：佐々木忍・柿本六美
7. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

例) 林中原Ⅰ遺跡Ⅳ

(遺跡名) (第4次)

8. 調査において以下の項目の一部を委託した。
表土掘削・埋め戻し：吉澤建設
測 量：(株)測 研
樹種同定・放射性炭素年代測定：(株)パレオ・ラボ
9. 本書における石器の石質鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会)、出土焼骨鑑定は橋崎修一郎氏(生物考古学研究所)に依頼した。
10. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。(五十音順敬称略)

秋田かなこ・麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・池田政志・石田真・小野和之・小川卓也
岡部郷夫(故人)・金子拓男・斉藤和之・佐藤雅一・佐々木由香・菅谷通保・鈴木徳雄・関 俊明・
高橋政充・高林真人・津金澤吉茂・堤 隆・土肥孝・中沢 悟・橋崎修一郎・市 隆之・福田貫之
藤巻幸男・水田 稔・山口逸弘

群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・(株)歴史の杜

11. 調査組織は次の通りである。

教 育 長 金子宥卷(～平成18年4月26日) 黒岩文夫(平成18年6月16日～)

課 長 山口伸行(平成18年3月31日まで社会教育課長、同年4月1日～教育課参事)

中島 寛(平成18年4月1日～平成19年3月31日 教育課長)

樋口 正(平成19年4月1日～平成21年3月31日)

山口伸行(平成21年4月～)

補佐兼係長 樋口 正 (～平成18年3月31日)

白石光男 (～平成18年3月31日、同年4月1日～教育課社会教育グループリーダー)

調査担当者 富田孝彦

調査参加者 市村勝美・岡部 通・柿本六美・唐澤美恵子・櫻井佳世子・佐々木忍・篠原良夫
嶋村和作・萩原 仁

凡 例

1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原」(国土地理院1997)である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。
遺 構：住居跡……………1/60 土坑(配石遺構)……………1/30
遺 物：復原土器・石皿……………1/4 土器片・礫石器類・打(磨)製石斧類……………1/3
土製品・剥片石器類……………1/2 石鏃……………1/1
4. 遺構の略号については以下の通りである。 SI：住居跡
5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復原土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。()内の数値は現存値、< >内の数値は復原値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面/内面の順で記した。
7. 挿図中のスクリーン・記号は以下の通りである。

遺構・土層図



焼土



地山

● 土器 ▲ 石器

遺物(石器)



磨面範囲



敲打範囲

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。

目 次

巻頭図版	
序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 既往の調査	15
第4節 基本層序	18
第3章 検出された遺構と遺物	23
第1節 竪穴式住居	23
第2節 配石遺構・石組遺構	55
第3節 遺構外出土遺物	58
第4章 自然科学分析	65
第1節 出土炭化材の樹種同定	65
第2節 放射性炭素年代測定	66
第3節 出土人骨の鑑定	73
第5章 まとめ	75
第1節 遺物の廃棄について	75
第2節 釣手付き注口土器の復原について	77
第3節 本遺跡出土の堀之内式土器について	79
遺物観察表	
写真図版	

目 次

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25, 000) …… 5	第26図 SI01出土遺物実測図13 (S = 1/3) ……46
第2図 遺跡周辺の段丘面分布図 (S = 1/25,000) …… 6	第27図 SI01出土遺物実測図14 (S = 1/3) ……47
第3図 調査地点位置図 (S = 1/2,500) ……14	第28図 SI01出土遺物実測図15 (S = 1/3) ……48
第4図 基本土層図 (S = 1/20) ……18	第29図 SI01出土遺物実測図16 (S = 1/3) ……49
第5図 林中原 I 遺跡Ⅳ全体図 (S = 1/60) ……22	第30図 SI01出土遺物実測図17 (S = 1/3) ……50
第6図 SI01実測図 (S = 1/60) ……24	第31図 SI01出土遺物実測図18 (S = 1/3) ……51
第7図 SI01遺物出土状況図 1 [全体] (S = 1/60) ……25	第32図 SI01出土遺物実測図19 (S = 1/2・1/1) ……52
第8図 SI01遺物出土状況図 2 [精製深鉢 1] (S = 1/60) ……26	第33図 SI01出土遺物実測図20 (S = 1/3・1/4) ……53
第9図 SI01遺物出土状況図 3 [精製深鉢 2] (S = 1/60) ……27	第34図 SI01出土遺物実測図21 (S = 1/3) ……54
第10図 SI01遺物出土状況図 4 [精製深鉢 3] (S = 1/60) ……28	第35図 1号配石実測図 (S = 1/30) ……55
第11図 SI01遺物出土状況図 5 [粗製深鉢] (S = 1/60) ……29	第36図 1号配石出土遺物実測図 (S = 1/3) ……56
第12図 SI01遺物出土状況図 6 [石器] (S = 1/60) ……31	第37図 2号配石実測図 (S = 1/30) ……57
第13図 SI01遺物出土状況図 7 [注口土器] (S = 1/60) ……33	第38図 2号配石出土遺物実測図 (S = 1/3・1/4) ……57
第14図 SI01出土遺物実測図 1 (S = 1/4) ……34	第39図 1号石組実測図 (S = 1/30) ……58
第15図 SI01出土遺物実測図 2 (S = 1/4) ……35	第40図 遺構外出土遺物実測図 1 (S = 1/3・1/4) ……60
第16図 SI01出土遺物実測図 3 (S = 1/4) ……36	第41図 遺構外出土遺物実測図 2 (S = 1/3・1/4) ……61
第17図 SI01出土遺物実測図 4 (S = 1/4) ……37	第42図 遺構外出土遺物実測図 3 (S = 1/3) ……62
第18図 SI01出土遺物実測図 5 (S = 1/4) ……38	第43図 遺構外出土遺物実測図 4 (S = 1/2・1/3・1/4) ……63
第19図 SI01出土遺物実測図 6 (S = 1/4) ……39	第44図 遺構外出土遺物実測図 5 (S = 1/2・1/3) ……64
第20図 SI01出土遺物実測図 7 (S = 1/4) ……40	第45図 出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真 ……66
第21図 SI01出土遺物実測図 8 (S = 1/4) ……41	第46図 年代測定図 1 ……70
第22図 SI01出土遺物実測図 9 (S = 1/4) ……42	第47図 年代測定図 2 ……71
第23図 SI01出土遺物実測図10 (S = 1/4) ……43	第48図 暦年校正結果 ……72
第24図 SI01出土遺物実測図11 (S = 1/4) ……44	第49図 SI01出土焼骨 ……73
第25図 SI01出土遺物実測図12 (S = 1/4) ……45	第50図 関連資料 ……79

表目次

第1表 周辺の遺跡 …… 7	第6表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果 ……68
第2表 林中原 I 遺跡調査一覧 ……16	第7表 SI01出土遺物層別別数量一覧 ……76
第3表 SI01柱穴計測表 ……23	第8表 SI01出土土器部位・層別別数量一覧 ……80
第4表 出土炭化材の樹種同定結果 ……66	第9表 林中原 I 遺跡Ⅳ出土遺物観察表 ……85
第5表 測定資料及び処理 ……67	第10表 林中原 I 遺跡Ⅳ出土遺物遺構別数量一覧 ……96

図版目次

- P L 1 1. 調査地点全景① (南東から)
2. 調査地点全景② (南西から)
- P L 2 1. SI01完掘状況① (南から)
2. SI01完掘状況② (南から)
3. SI01遺物出土状況① [全体] (南から)
4. SI01遺物出土状況② [部分①] (南東から)
- P L 3 1. SI01遺物出土状況③ [部分②] (南東から)
2. SI01遺物出土状況④ [第17図25] (南西から)
3. SI01遺物出土状況⑤ [第20図40] (南から)
4. SI01遺物出土状況⑥ [第21図41] (西から)
5. SI01遺物出土状況⑦ [第24図51] (西から)
6. 1号配石完掘状況 (西から)
7. 1号配石半載状況① (西から)
8. 1号配石半載状況② (西から)
- P L 4 1. 2号配石完掘状況 (南から)
2. 2号配石半載状況 (東から)
3. 1号石組完掘状況 (南から)
4. 1号石組半載状況① (南から)
5. 1号石組半載状況② (西から)
6. 発掘作業風景① (南東から)
7. 発掘作業風景② (南から)
8. 発掘作業風景③ (南東から)
- P L 5 SI01出土遺物①
- P L 6 SI01出土遺物②
- P L 7 SI01出土遺物③
- P L 8 SI01出土遺物④
- P L 9 SI01出土遺物⑤
- P L 10 SI01出土遺物⑥
- P L 11 SI01出土遺物⑦
- P L 12 SI01出土遺物⑧
- P L 13 SI01出土遺物⑨
- P L 14 SI01出土遺物⑩
- P L 15 SI01出土遺物⑪
- P L 16 SI01出土遺物⑫
- P L 17 SI01出土遺物⑬ 1・2号配石出土遺物 遺構外出土遺物①
- P L 18 遺構外出土遺物②
- P L 19 遺構外出土遺物③
- P L 20 出土遺物拡大写真

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成15年7月上旬に施主より個人専用住宅建設の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会社会教育課に照会があった。対象地は周知の包蔵地「中原Ⅰ遺跡（No45）」の範囲に含まれていることから試掘調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第52条第1項（現第93条第1項）の規定により、同年7月10日付け長教社第260号で長野原町教育委員会を經由して施主より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。また同日付けで施主より長野原町教育委員会へ「開発に伴う文化財調査願書」が提出された。同年7月11日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内の住宅建設予定範囲に2本の試掘坑（トレンチ）を設定して、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果、縄文時代後期前葉の敷石住居跡が検出され、長野原町教育委員会としては、埋蔵文化財の保護に理解・協力してほしい旨を施主に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、継続して発掘調査を実施することとなった。なお、埋蔵文化財包蔵地の改訂に伴い、中原Ⅰ遺跡は平成16年4月1日付けで「林中原Ⅰ遺跡」と名称を変更した。

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査

a. 表土除去

表土除去は重機（バックホー）を使用して行った。試掘調査で調査区北側は表土から1m弱、南側では20cm程度で遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。住居跡は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していった。確認面が黒色土中ということもあり作業は困難な側面もあった。

c. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、配石遺構の場合は長軸に沿って半載して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/10のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

d. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が小規模であったので遺物出土位置図と同様に1/10のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光

波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況（位置）図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラー滑りの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。また参考用にデジタルカメラも用いて撮影した。

2. 自然科学分析

遺跡の性格や内容をより具現化するために発掘調査の成果に基づき自然科学的手法を用いて以下の2項目を実施した。

a. 出土炭化材樹種同定

SI01覆土で多量の土器・石器に混じり、骨片や炭化材が出土している。また石組遺構からも炭化材が出土しており、住居で使用されていた建築部材を含む当時の木材利用の樹種を同定することを目的とする。

b. 放射性炭素年代測定

先述したとおり骨片とともに炭化材が出土していることから、それらのうち遺存度が良好な炭化材を加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。これにより住居内に廃棄された土器群や石組遺構の暦年代を算出することを目的とする。

c. 出土焼骨鑑定

上記の分析に用いた試料と共伴している焼骨を専門の視点から鑑定し、人骨・獣骨の識別や部位を同定することを目的とする。

3. 調査経過

a. 発掘調査

発掘調査は平成15年7月11日から7月18日にわたって実施された。

7月11日、試掘確認調査、試掘坑を掘削中に、縄文後期前葉敷石住居跡を検出。施主と協議。継続して、住宅建設予定地を重機により表土除去。遺物の出土が多く、慎重に除去。何とか表土除去終了。事業団藤巻氏来跡。

7月14日、午前は雨天のため、午後から調査。トレンチ跡を利用してサブトレ。遺構精査により敷石住居跡と確定（以下SI01）。また覆土に土器及び石器・骨片が異常に多く、土器捨て場となっていることが判明。測研本間氏・篠原憲一氏来跡。

7月15日、午前SI01遺物出土状況写真清掃、撮影。午後、遺物出土状況平面図作成、遺物取り上げ（No1～130）。その後ベルト残して掘り下げ。

7月16日、午前、SI01掘り下げ、床面検出。午後、セクション写真清掃、撮影。セクション図作成。配石遺構半載。

7月17日、午前、SI01ベルト外し、遺物取り上げ（No131～156）。1・2号配石セクション写真撮影・図面作成。午後、SI01壁・柱穴精査。西壁は判然とせず。平面図作成。石組遺構（炉跡？）

断ち割り。セクション写真・作図

7月18日、午前、1・2号配石、石組遺構完掘、写真、平面図作成。石組遺構を中心として北・西にサブトレを入れるが床面等は検出されず、住居とするには至らなかった。全体清掃、全景写真。午後、平面図補足。撤収。事業団山口氏、小野氏来跡。

b. 整理調査・報告書作成

整理調査は平成15年8月11日～平成22年3月12日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで24箱、現場で作成した図面類は15枚であった。整理調査は担当の他に作業員2名という体制であった。

遺物洗浄は平成15年8月11日～同年9月8日まで、注記作業は同年9月9日～10月7日までのそれぞれ約1ヶ月間を充てた。

遺物の接合作業は最小限のものを同年10月9日～10月17日まで行い、石膏による復原作業は平成16年3月8日～同年3月30日、平成17年6月22日～平成18年3月30日、平成20年1月15日～同年3月31日と調査や事業の合間に実施した。この復原作業により復原実測可能な個体が50点ほどあることが判明した。

遺物の実測は平成17年9月15日～平成18年3月31日、平成18年5月24日～平成19年2月28日、平成20年1月15日～同年3月30日、平成20年4月7日～同年5月20日までの調査や事業の合間に実施した。

遺物・遺構のトレースは平成21年5月27日～同年10月28日、版下作成は平成21年10月2日～12月11日まで、写真図版の作成は12月11日～12月22日までに実施した。併せて編集作業は平成21年11月4日から遺物観察表の作成をはじめ、1月上旬までに仮割付を行い、期日の関係を考慮して、割付優先の原稿執筆形態をとった。執筆作業は12月下旬～平成22年1月下旬にかけて行い、併せて保管用に資料・遺物の整理をして3月中旬に全ての作業を完結した。

石器の石質鑑定は平成16年3月5日に飯島静男氏（群馬県地質学会）にお願いした。

出土炭化材樹種同定ならびに放射性炭素年代測定を平成18年12月13日～平成19年3月23日まで(株)パレオ・ラボに委託して実施した。

出土焼骨鑑定は、平成21年11月～平成22年1月下旬にかけて橋崎修一郎氏（生物考古学研究所）にお願いした。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置

林中原1遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山（標高1,341m）・本白根山（標高2,171m）の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。林中原1遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の対岸には岩峰丸岩（標高1,124m）がそびえている。丸岩は南側を除く3方が100mにも達する垂直な岩崖に取り囲まれ、吾妻川方面から臨むと見事な景観とその巨大な円柱状の独特な景観は太古から当該地域のランドマークとしての要素を備えている。

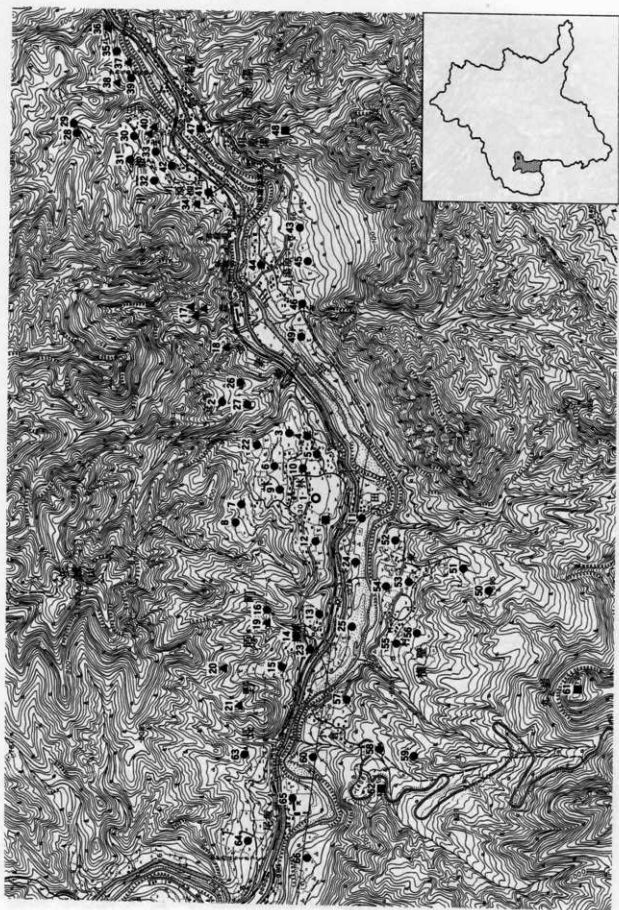
本遺跡の立地する段丘は吾妻川から下位・中位・上位・最上位の4段からなる河岸段丘の最上位段丘に相当し、吾妻川からの比高差は約80mを測る。この段丘は約21,000年前に噴出した応楽泥流堆積物を削って形成されている。この上に関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間-草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積している。調査地点の標高は629m位である。

第2節 周辺の遺跡

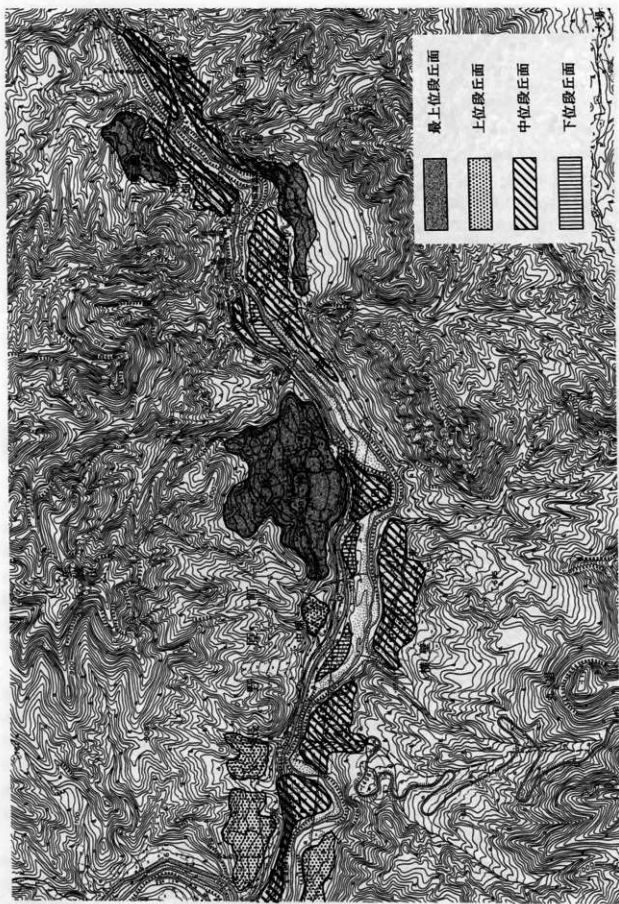
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した¹⁾。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成21年度11月現在で215の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている²⁾。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が常時数カ所の発掘調査を継続している。近年多かった水没地域住民による非水没地域への移転が一段落してきて、町教育委員会が実施している町内遺跡調査の調査原因のうち水源地域対策特別措置法（以下、水特法）関連事業がかなりの割合を占めるようになってきている³⁾。その矢先の政権交代による所謂「ダム本体中止声明」であった。具体的な方策は未確定であるが、水没地域住民の生活再建事業は継続的に行う意向から、今後も埋蔵文化財に係わる調整が重点的に必要な地域であることに変わりはない。

本遺跡を含む吾妻川流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している（第1・2図・第1表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見し



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25, 000)



第2図 遺跡周辺の段丘面分布図 (S = 1/25,000)

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	町	種別	時代	概	要	備	考
1	林中原I遺跡	45	集落跡、城跡	縄文・平安・中世・近世	本道跡		文献1, 2, 6, 7, 9, 13, 19, 38, 61, 62	旧中原I遺跡
2	立馬I遺跡	37	集落跡、墓その他	縄文・弥生・平安中世・近世	平成13・14・17年度調査(事)縄文時代早期前半住居跡2軒、包含層遺物多数、晚期住居跡1軒、弥生時代中期住居跡2軒、塚廻基、平安時代住居跡3軒のほか、縄文時代～平安時代の陥し穴を多数検出。		文献1, 2, 31, 55, 56, 59	旧立馬遺跡
3	東原I遺跡	38	散布地	縄文・平安・近世	平成17・18年度調査(町)、20年度調査(事)縄文時代前期～中期後半の陥穴、土坑。平安時代住居跡。		文献2, 10, 11, 62	
4	東原II遺跡	39	散布地	縄文	平成20年度調査(事)縄文後期：土器片、黒曜石片出土。		文献2, 22, 62	
5	東原III遺跡	40	散布地	平安・近世	平成15・18年度調査(町)、20・21年度調査(事)近世屋敷跡1ヵ所、土坑、ビット検出。		文献2, 7, 11, 62	
6	上原I遺跡	41	散布地	縄文・平安・近世	平成18年度調査(町)、9年度調査(事)縄文時代前期包含層、中期後半住居跡を検出。		文献2, 11, 22, 51	
7	上原II遺跡	42	散布地	平安	平成18年度調査(町)、16年度調査(事)縄文時代中期前半包含層。		文献2, 11, 58	
8	上原III遺跡	43	散布地	平安	平成18年度調査(町) 平安時代土坑、製鉄関連遺構。		文献2, 11	
9	上原IV遺跡	44	散布地	縄文・近世	平成14・18・20年度調査(町)、15年度調査(事)縄文時代後期散在石遺跡、晩期包含層。近世溝、下駄、曲物の底、瓦具、石鉢、陶磁器が出土。		文献2, 6, 11, 13, 36, 57	
10	林中原II遺跡	46	散布地	縄文・弥生・中世近世	平成15～19・21年度(町)、16・20・21年度調査(事)縄文時代中期後半～後期の拠点集落、墓坑8基、弥生時代前期末～中期前半土坑・再葬墓か、中期前半住居跡4軒。中近世独立住居跡群。		文献2, 7～12, 58, 62	旧中原I遺跡
11	下田遺跡	47	集落跡、その他	縄文・近世	平成6・7・9年度調査(事)天明泥流に埋没した民家、畑跡。		文献2, 22, 48, 49, 51	[原道跡地図] №3126、旧下原(下田)遺跡
12	林宮原遺跡	48	集落跡	縄文・古墳・平安	平成14～16・18～20年度調査(町)縄文中期～後期包含層、古墳時代住居跡。平安時代住居跡、土坑等を検出。		文献1, 2, 6～13	[原道跡地図] №3127、旧宮原遺跡(神社前遺跡)
13	中樞I遺跡	49	散布地	縄文・平安	平成18年度調査(町)、11年度調査(事)縄文時代早期包含層。平安時代住居跡?。黒曜石片、チャート片出土。		文献2, 11, 22, 53	旧中樞遺跡
14	榎木I遺跡	50	散布地	縄文・平安	平成21年度調査(事) 平安時代住居跡4軒、かまど屋1軒、土坑62基、ビット264基、調4基、焼土2基、墓石4基。江戸時代礎石建物跡1棟等。		文献2	
15	榎木II遺跡	51	集落跡、近世	縄文・平安・中世近世	平成12年度調査(町) 12・13・16・17年度調査(事)縄文時代早期前半(赤土系)住居跡21軒、前期住居跡3軒、中期初期住居跡2軒、平安時代住居跡38軒。「三家」の黒土土器、銅字「弥」をもつ石製紡錘車出土。中世の独立住居跡群検出。		文献2, 4, 22, 37, 44, 54, 55, 58, 59	
16	二反沢遺跡	52	社寺、その他	中世・近世	平成12年度調査(事)中世の石垣を伴う土坑ほか、銅泡淵遺物。近世の畑跡を検出。		文献2, 29, 54	旧大乗院堂跡
17	久森沢I岩陰群	53	その他	不明	岩陰遺跡。		文献2	
18	久森沢II岩陰群	54	その他	不明	岩陰遺跡。		文献2	
19	滝沢観音岩陰	55	その他	不明	岩陰遺跡。「滝沢観音」の堂宇と石仏群。		文献2	
20	峰ヶ沢岩陰	56	その他	縄文	岩陰遺跡。打製石片出土。		文献2	
21	御飯山岩陰	57	その他	不明			文献2	
22	花畑遺跡	205	集落跡	縄文・平安	平成10年～12年度調査(事) 平安時代住居跡3軒、陥し穴多数検出。		文献2, 22, 52～54	
23	榎木II遺跡	202	散布地	縄文・弥生・平安中世	平成10年度調査(事)縄文前～後期、弥生中期：包含層		文献22	
24	下原遺跡	204	集落跡、その他	縄文・弥生・古墳・平安・中近世	平成12・13・15・16年度調査(事) 古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡1軒、中世の原敷跡1ヵ所。中世から近世の畑跡3面を検出。		文献2, 22, 23, 32, 54, 55, 57, 58	
25	中樞II遺跡	203	その他	近世	平成11～13・15年度調査(事) 天明泥流で埋没した畑跡、および安永九年と考えられる埋没畑跡。		文献2, 23, 24, 53～55, 57	
26	立馬II遺跡	213	集落跡	縄文・弥生・平安	平成14年度調査(事) 縄文時代中期初頭～後半住居跡11軒、縄文時代早期包含層遺物。縄文時代～平安時代陥し穴多数検出。		文献28, 56	
27	立馬III遺跡	215	集落跡	縄文・平安	平成19年度調査(事) 縄文時代早期を中心とする集落跡。縄文時代住居跡5軒、竪穴式遺構2基のほか集石、土坑など。平安時代の土坑、陥し穴多数。中近世の土坑、溝。		文献43, 61	
28	温井I遺跡	1	散布地	縄文・平安	縄文後期。		文献2	
29	温井II遺跡	2	散布地	縄文	中期。		文献2	
30	三平I遺跡	3	集落跡	縄文・弥生・平安・近世	平成20年度調査(町)、10・16・17年度調査(事)縄文時代早期土坑、前期住居跡、弥生時代前期末～中期土坑、平安時代住居跡、独立住居跡、土坑、陥し穴等検出。		文献2, 13, 22, 33, 52, 58, 59	
31	三平II遺跡	4	集落跡	縄文・平安	平成16年度調査(事) 縄文時代早期～前期の土器・石器を多数出土。独立住居跡7棟ほかを含む中世原敷跡1ヵ所。		文献2, 33, 58	
32	上ノ平I遺跡	5	集落跡	平安	平成18・19年度調査(事) 縄文時代中期中葉～後期初期住居跡16軒、陥し穴134基、平安時代住居跡20軒を検出。県内2例目となる泉朝十二観の直観水甕が出土。		文献2, 41, 60, 61	

No.	遺跡名	町%	種別	時代	概要	備考
33	上ノ平日遺跡	6	散布地	不明	チャート片出土。	文献2
34	西宮岩跡	13	その他	不明	岩跡遺跡。	文献2
35	石畑遺跡	210	散布地、その他	縄文・弥生・近世	平成7・9・10年度調査(事) 縄文時代前期包埋層、弥生時代中期土坑。近世畑。	文献2, 22, 49, 51, 52
36	石畑1号遺跡	9	墓その他	縄文	昭和53年度調査(事) 縄文草創期～晩期：土器片、獣骨、人骨などを出土。	文献2, 16, 17
37	石畑日遺跡	10	その他	不明	岩跡遺跡。	文献2
38	二社平岩跡	11	その他	不明	岩跡遺跡。	文献2
39	二社平遺跡	209	散布地	縄文・弥生・平安・近世	平成8・10年度調査(事) 弥生後期土器片。近世畑。	文献22, 50, 52
40	三ツ堂岩跡	12	その他	不明	岩跡遺跡。堂宇・石仏群は平成20年度に本移設。	文献2
41	西宮遺跡	7	散布地	縄文・近世	平成20年度調査(事) 総埋没埋没5区画以上、復旧済19区画、キツクス、小屋と屋敷1棟を検出。	文献2, 62
42	東宮遺跡	208	その他	近世	平成12年度調査(町)、7～9・19～21年度調査(事) 天明泥流で埋没した民家、それに伴う建物跡、畑跡等を検出。	文献4, 22, 49～51, 61, 62
43	川原湯中原I遺跡	16	散布地	縄文	平成19年度調査(町) チャート片出土。	文献2, 12 旧中原I遺跡
44	石川原遺跡	17	散布地	縄文	平成20年度調査(事) 縄文時代中期後半～後期を中心とする拠点集落跡。	文献2, 62 北入遺跡(No.20)と統合
45	川原湯中原II遺跡	18	散布地	縄文	平成17年度調査(町)	文献2, 10 旧中原II遺跡
46	川原湯中原田遺跡	19	散布地	縄文・平安	縄文中期：チャート片出土。	文献2 旧中原田遺跡
47	西ノ上遺跡	212	その他	近世	平成18年度調査(町)、14年度調査(事) 天明泥流に埋没した畑跡・道を検出。	文献11, 24, 56
48	金花山岩跡	207	城館跡	中世	平成12年度調査(町・事) 明治期の「川原湯真因」に「トリアト」の記載あり。	
49	川原湯勝沼遺跡	206	散布地、その他	縄文・平安・近世	平成9・15・16年度調査(事) 縄文時代晩期の埋没2基。平安時代住居跡3軒。天明泥流に埋没した畑跡。	文献24, 26, 51, 57, 58
50	上野I遺跡	21	散布地	縄文・平安		文献2
51	上野II遺跡	22	散布地	縄文・平安		文献2
52	横壁勝沼遺跡	23	集落跡、墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成6・7年度調査(事) 縄文時代土坑数基。楕円形尖頭器1点表採。平安時代住居跡1軒検出。	文献1, 2, 22, 48, 49 「泉道跡地区」No.3118, 旧勝沼遺跡(東平道跡)
53	山根I遺跡	26	集落跡	縄文・平安	平成12・17年度調査(事) 縄文時代・平安時代の集落跡。	文献1, 2 「泉道跡地区」No.3118, 山根I遺跡(中村道跡)
54	横壁中村遺跡	24	集落跡、墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成8～18年度調査(事) 縄文時代中期後半～後期を中心とした拠点集落跡。平安時代住居跡も含めて250軒以上を検出。中近世獨立住居建物跡、礎石建物、土坑墓、塚など多数検出。	文献2, 23, 25, 27, 30, 34, 39, 40, 46, 47, 50～60 旧上野田遺跡
55	山根II遺跡	29	集落跡	縄文・弥生・平安・近世	平成16・17年度調査(町)、10・13・18年度調査(事) 縄文時代中期後半住居跡3軒、土坑39基、中近世の溝1条ほか検出。	文献2, 9, 10, 22, 36, 52, 55, 60
56	山根IV遺跡	30	散布地	縄文・平安	平成19年度調査(町) 縄文中期：チャート片出土。	文献2, 12
57	西久保I遺跡	31	集落跡	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成6・10・12年度調査(事) 縄文時代中期末葉の敷石住居跡、水場遺構等を検出。	文献2, 22, 48, 52, 54
58	西久保II遺跡	32	散布地	平安		文献2
59	西久保III遺跡	33	散布地	不明		文献2
60	西久保IV遺跡	216	その他	近世	平成17年度調査(町)、12・21年度調査(事) 天明泥流に埋没した畑跡。泥流の末端を確認。	文献10, 54
61	丸岩城跡	34	城館跡	中世	土塁や水場が遺存。	文献1, 2, 14, 15
62	柳沢城跡	35	城館跡	旧石器・縄文・中世	平成4・5年度調査(町) 中世：部跡、堀切、土房、礎石、腰曲輪、石組遺構、溝、陶磁器、鉄製品、銅製品、石臼等を検出。	文献1, 2, 3, 14, 15, 18
63	弁神遺跡	62	集落跡、その他	縄文・平安・近世	平成21年度調査(町)、8・9・14・17年度調査(事) 縄文時代中期後半住居2軒、土坑、竈穴。古代の可能性のある畑跡。	文献2, 36, 50, 51, 56, 59
64	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成6～20年度調査(事) 縄文中期後半～後期の住居跡を中心とする拠点集落跡。平安時代住居跡、中世獨立住居建物跡等多数検出。	文献1, 2, 21, 35, 38, 42, 45, 48～62 旧一本松遺跡
65	尾坂遺跡	201	その他	近世	平成6・7・11・18～21年度調査(事) 天明泥流で埋没した民家と麻畑、溝等を検出。畑下から縄文時代後期土坑や平安時代住居跡検出。	文献22, 48, 49, 53, 60～62
66	タマ戸遺跡	200	その他	縄文・近世	平成19年度調査(町)、9～12・14・15年度調査(事) 天明泥流で埋没した畑跡、建物跡を検出。縄文土器包埋層。	文献12, 20, 23, 24, 48～54, 56, 57

たり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。

(1) 旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡(62)で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間一草津黄色軽石層(As-YPk)が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡(4)でしか確認されていないのが現状である。

(2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰(36)がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・押型文・燃糸文が認められる⁽⁵⁾。横壁勝沼遺跡(52)では草創期の槍形尖頭器が採掘されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、榎木Ⅱ遺跡(15)、立馬Ⅰ遺跡(2)、立馬Ⅲ遺跡(27)で早期の集落が検出されている。榎木Ⅱ遺跡では早期前半燃糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では燃糸文期の住居跡の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連続と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、三平Ⅰ遺跡(30)、三平Ⅱ遺跡(31)、花畑遺跡(22)、幸神遺跡(63)、長野原一本松遺跡(64)、坪井遺跡などでも確認されている。それまでの岩陰での生活から早期前半燃糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の縄文時代遺跡の大きな特徴の一つでもある。

②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡で前期初頭(花積下層式期)の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層式と長野県で主体的な塚田式との共伴が確認された⁽⁶⁾。暮坪遺跡では前期前葉(ニツ木式期)の住居跡⁽⁷⁾、長畝Ⅱ遺跡では前期前葉(関山式期)の土坑と前期前葉(黒浜式期)の住居跡・土坑が検出されている⁽⁸⁾。東部地区では榎木Ⅱ遺跡(15)で前期前葉(黒浜式期)の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡(52)では遺構外で少量の破片が認められている。前期後半は榎木Ⅱ遺跡(15)と本遺跡で前期後葉(諸磯式期)の住居跡が、川原湯勝沼遺跡(49)と三平Ⅰ遺跡(30)で同時期土坑、立馬Ⅰ遺跡(2)で集石遺構が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。前半は未だ少なく、丘陵上に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年丘陵上の遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は楡木Ⅱ遺跡（15）で住居跡3軒が確認されているのみである。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡（26）で住居跡12軒・竪穴遺構7基、本遺跡で住居跡が1軒、幸神遺跡（62）で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡（57）では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡（63）で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡（10）と横壁中村遺跡（54）では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、最近調査された上ノ平Ⅰ遺跡（32）では同時期の住居跡が12軒検出された。中期前半はその立地からか現時点では東部地区のみの検出である。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡（64）、横壁中村遺跡（54）を筆頭として近年の調査により石川原遺跡（44）、林中原Ⅱ遺跡（10）が新たに加わり、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前4者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曾利B式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている⁽⁹⁾。土器は大きく4系統（①加曾利E式土器〈北関東系〉、②曾利・唐草文系土器〈信州系〉、③「郷土」式土器〈①と②の融合型式〉、④栃舎Ⅱ式土器〈越後系〉）が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環状間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている⁽¹⁰⁾。この坪井遺跡出土土器の傾向は前4者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」出土土器にも看取される⁽¹¹⁾。その他、向原遺跡では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い⁽¹²⁾。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半までで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡⁽¹³⁾・向原遺跡⁽¹⁴⁾、滝原Ⅲ遺跡⁽¹⁵⁾、古屋敷遺跡⁽¹⁶⁾、東部地区では上原Ⅳ遺跡（9）、上ノ平Ⅰ遺跡（32）、本遺跡に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曾利B式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡（64）、横壁中村遺跡（54）で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡で3軒検出されているのみである。後期終末（安行Ⅰ・Ⅱ式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡（2）で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑Ⅰ岩陰（35）で土器片が出土している他、横壁中村遺跡（54）で晩期末葉（千綱式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は依然ないものの後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡（2）では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡（54）では晩期末葉の住居跡2軒、埋壘1基、上原Ⅳ遺跡（9）では土坑1基

が検出されている。立馬 I 遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡 (49) からは該期の土坑が数基検出され、その中の 1 基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に 2 個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「水式突帯壺」⁽¹⁷⁾ の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡 (66) で水式土器の浅鉢、向原遺跡で大洞 A' 式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する 3 遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。立馬 I 遺跡 (2) で中期後半の住居跡 2 軒と土器棺墓 2 基を含む土坑が数基、長野原一本松遺跡 (63) では中期前半までと考えられる土坑 1 基、横壁中村遺跡 (54) では埋壺 (再葬墓か) 1 基が検出され、東海地方に分布する榎王式土器の甕が出土している。近年の調査で林中原 II 遺跡 (10) では中期前半と考えられる住居跡 2 軒の他、前期末に遡る土坑墓 (再葬墓か) が検出されている⁽¹⁸⁾。また遺物出土量が少なく、時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡でも中期と考えられる土坑が 1 基、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が 7 基、三平 I 遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基確認されている。下原遺跡 (24) では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。遺構外では外輪原 I 遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的まとまっている⁽¹⁹⁾。後期に関しては未だ少なく、石畑遺跡 (34) で土坑 1 基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡、新田原 I 遺跡で土器片が表採されている他、立馬 I 遺跡 (2) では遺構外で、二社平遺跡 (38) 周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

(4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで 5 世紀後半の土器片は坪井遺跡、長野原一本松遺跡 (63)、二社平遺跡 (38) などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成 15 年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡 (12) で 5 世紀末～6 世紀初頭の住居跡が 1 軒検出されたのが初例である。これに続いて平成 16 年度の調査で川原湯勝沼遺跡 (49) で焼土を伴う土坑から同時期の土器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡 (24) でも同時期の住居跡 1 軒の他、土師器 (片) がまとめて出土している。ともに吾妻川に直面した中位・下位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら 3 遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。

また昭和 13 年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和 11 年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計 3 基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか (てづか)」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内 (宮原の誤植が筆者註) 地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが 3 基あるということが

注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡、向原遺跡、長畝Ⅰ遺跡、東部地区では立馬Ⅰ遺跡(2)、東原Ⅰ遺跡(3)、林宮原遺跡(12)、榎木Ⅰ遺跡(14)、榎木Ⅱ遺跡(15)、花畑遺跡(22)、下原遺跡(24)、三平Ⅰ遺跡(30)、上ノ平Ⅰ遺跡(32)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、長野原一本松遺跡(64)、尾坂遺跡(65)などから住居跡や掘立柱建物跡が検出され、該期集落として把握されている。この中で榎木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、試掘調査ではあるが、上原Ⅲ遺跡(8)では土坑が確認されたほか、羽口や鉄サイが出土しており製鉄関連遺構が存在することが想定される。

(6) 中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡、長野原城跡、丸岩城跡(60)、柳沢城跡(61)、金光山砦跡(48)などがあり、その他に林城跡、林の烽火台などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石白などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している⁽²⁰⁾。また近年本遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金光山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっていく。それらを列举すると立馬Ⅰ遺跡(2)、榎木Ⅱ遺跡(15)、二反沢遺跡(16)、下原遺跡(24)、横壁中村遺跡(54)、西久保Ⅰ遺跡(57)、長野原一本松遺跡(64)となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴遺構、榎木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど製鉄関連遺物などが検出されており注目される。

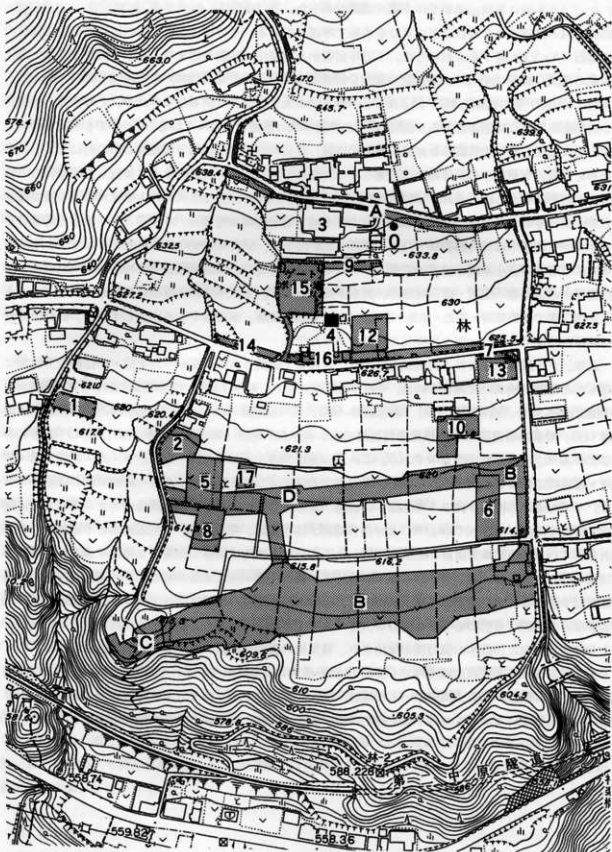
(7) 近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、

2.4~2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石 (As-YP) 降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石 (As-D)、4世紀の浅間C軽石 (As-C)、天仁元 (1108) 年の浅間B軽石 (As-B)、天明3 (1783) 年の浅間A軽石 (As-A) という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3 (1783) 年の噴火は軽石降下後に襲った泥流 (鎌原火砕流) により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらした。有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬭恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窟」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが⁽²¹⁾、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるランド造成中に日持供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡の痕跡が確認された⁽²²⁾。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている⁽²³⁾。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅の状況であった一端を垣間見る発見があった⁽²⁴⁾。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、鶴木I遺跡、下田遺跡(12)、下原遺跡(24)、中棚II遺跡(25)、西宮遺跡(41)、東宮遺跡(42)、石川原遺跡(44)、西ノ上遺跡(47)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、西久保IV遺跡(60)、尾坂遺跡(65)、久々戸遺跡(66)などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている⁽²⁵⁾。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる⁽²⁶⁾。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。上原IV遺跡(9)、二反沢遺跡(16)、幸神遺跡(63)、長野原一本松遺跡(64)が該当する。このうち上原IV遺跡では溝(旧河川流路)を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。



第3図 調査地点位置図 (S = 1/2,500)

第3節 既応の調査

今回の調査は林中原1遺跡の第4次調査にあたる。本遺跡は長野原町教育委員会だけで平成21年11月現在で17次にわたる調査が実施されている。その中には試掘確認調査・立会調査により、本発掘調査に至らなかったものも多く含んでいるが、この数字はこの数年で本遺跡内で開発が集中して行われてきたことを如実に物語っている。また町教委にさきがけて群馬大学史学研究室による学術調査や近年では八ッ場ダム工事関連で(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による調査も実施されている(第3図・第2表)。

先述したとおり、本遺跡での最初の発掘調査は昭和37年11月23日～26日まで群馬大学史学研究室により実施された^[27]。詳細は不明であるが縄文時代中期の住居跡を1軒調査したという。遺物は同研究室に保管されている。

第1次調査は平成14年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。トレンチ調査により遺構・遺物を検出するには至らなかった。対象地は谷地で泥炭層を基盤としていることが確認された。

第2次・第3次調査は平成15年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。第2次調査ではトレンチ調査であったが遺構・遺物を検出するには至らなかった。第3次調査では北側の町道拡幅のため住宅を移動するという計画が出された。開発事業主と協議し、試掘調査を行うことで合意していたが、その後設計変更で盛土対応(現況から1m)することとなり、現状保存されることになった。

第5次調査は平成16年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。トレンチ調査により遺構は検出されなかったが縄文時代中期後半の土器片が出土している。

第6次～第8次調査は平成17年度に実施された。第6次調査は個人専用住宅建設に先立って実施され、トレンチ調査により縄文時代中期後半の包含層が確認されたが、顕著な遺構は検出されなかった。第7次調査は町道林線拡幅工事(水特法事業)に先立って実施され、縄文時代後期前葉住居跡1軒、中期後半～後期前葉土坑11基が検出された。第8次調査は個人専用住宅建設に先立って実施され、トレンチ調査により縄文時代前期後半の包含層が確認されたが、顕著な遺構は検出されなかった。

第9次～第11次調査は平成18年度に実施された。第9・10次調査は林地区園芸施設整備事業(水特法事業)に先立って実施された。第9次調査では縄文時代後期前葉住居跡2軒、配石遺構24基が検出された。うち1軒からは炉体土器2個体をはじめ、堀之内1式新段階の良好な資料が得られた。第10次調査はトレンチ調査により縄文時代中期後半の包含層が確認されたが、顕著な遺構は検出されなかった。第11次調査は林地区土地改良事業(水特法事業)の事業採択前の埋蔵文化財の取り扱いを決定するための確認調査を実施した。本遺跡全体で農道や水路が計画されている箇所を中心にトレンチ7本を設定し調査した。その結果、遺構は判然としなないものの縄文時代中期後半～後期前葉包含層や中近世の溝(堀)などが検出された。

第12次～第14次調査は平成19年度に実施された。第12次・第13次調査は個人専用住宅建設に先立って実施された。第12次調査では縄文時代後期前葉住居跡2軒(うち1軒は中期後半か)、配石遺構(配石基含む)10基、土坑(埋壘2基・陥し穴2基含む)13基、中期後半～後期前葉包含層、平安時代土坑2基(掘立柱建物跡の可能性あり)が検出された。調査面積に比して遺物の出土量が多く、特に住居跡出土土器では注口土器の出土が顕著であった。整理段階ではあるがほぼ完形に復元できるものが3個体は確認されている。また調査区全体で多孔石の出土が目立った。第14次調査は町道林線拡幅工事(水特法事業)に先立って実施され、縄文時代中期後半～末住居跡2軒、土坑15基が検出された。

第2表 林中原I遺跡調査一覧

※番号は第3図に対応

番号	調査年度	調査機関	原種 因類	調査面積 (開発面積)	概 要	備 考
0	昭和37年度	群馬大学 史学研究室	字南調査	?㎡ (—)	縄文中期住居1(略長方形・伊)	文献19 未報告
1	平成14年度	長野県町教育委員会	個人専用住宅 試掘調査	10㎡ (288㎡)	遺構なし	文献6
2	平成15年度	〃	個人専用住宅 試掘調査	52㎡ (489㎡)	遺構なし	文献7
3	〃	〃	個人専用住宅 立会調査	—㎡ (2,684.26㎡)	現状保存	文献7
4	〃	〃	個人専用住宅 本調査	59.8㎡ (675.42㎡)	縄文後期敷石住居1、配石遺構2、石組遺構1(住居跡か)	文献7 本報告
5	平成16年度	〃	個人専用住宅 試掘調査	28㎡ (734.69㎡)	縄文包含層	文献9
6	平成17年度	〃	個人専用住宅 試掘調査	59㎡ (647㎡)	縄文中期包含層	文献10
7	〃	〃	町道林線拡幅 本調査	500㎡ (749.52㎡)	縄文後期前葉住居1・土坑18基	文献10 未報告 水特法
8	〃	〃	個人専用住宅 試掘調査	15㎡ (528㎡)	縄文前期後半包含層	文献10
9	平成18年度	〃	園芸施設(3地区) 本調査	190㎡ (1820㎡)	縄文後期前葉住居2・配石遺構24	文献11 未報告 水特法
10	〃	〃	園芸施設(4地区) 試掘調査	42㎡ (789㎡)	縄文包含層	文献11 未報告 水特法
11	〃	〃	土地改良事業 試掘調査	436㎡ (2541㎡)	縄文中期後半～後期包含層・後期初頭住居・中近世溝状遺構1基他	文献11 未報告 水特法
12	平成19年度	〃	個人専用住宅 本調査	480㎡ (555㎡)	縄文後期前葉住居2・配石遺構10・土坑15(平安土坑含む)・中期後半包含層1・掘立柱建物跡1	文献12 未報告
13	〃	〃	個人専用住宅 試掘調査	78㎡ (564.22㎡)	縄文後期初頭～前葉包含層	文献12
14	〃	〃	町道林線拡幅 本調査	165㎡ (760㎡)	縄文中期後半～末住居2・土坑15	文献12 未報告 水特法
15	平成20年度	〃	町営住宅 本調査	535㎡ (1291㎡)	縄文中期末住居1・後期初頭～前葉住居3・配石遺構22・土坑4	文献13 未報告
16	〃	〃	町道林線拡幅 本調査	340㎡ (825㎡)	縄文中期末～後期前葉包含層・埋没河道・土坑11	文献13 未報告 水特法
17	平成21年度	〃	個人専用住宅 試掘調査	19㎡ (205㎡)	縄文中期末～後期前葉包含層	未報告
A	平成16年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	町道拡幅 本調査	1,415㎡ (1,415㎡)	時期不明土坑8 和川テフラ	文献61 未報告
B	平成19年度	〃	国道付替・町道敷設 本調査	9,874㎡ (9,874㎡)	(縄文)前期前半住居3・中期前半住居1・土坑8・陥し穴13・ピット20(中近世)掘立柱建物61・竪穴状遺構3・土坑217・堀7・溝17・ピット1434・基6・石垣5・ため池2・構2	文献64・65 一部20年度に 調査継続 未報告
C	平成20年度	〃	国道付替 本調査	618㎡ (618㎡)	(縄文)土坑7(中世)土坑3・土取穴1・ピット17・基1・道1(近世)礎石建物1・土坑3・土取穴10・溝2・基3・石垣2・塙土6・道1	文献65 未報告
D	平成21年度	〃	町道敷設 本調査	1,954㎡ (1,982㎡)	(縄文)前期後葉住居1(中近世)掘立柱建物・溝・土坑	未報告

第15次・第16次調査は平成20年度に実施された。第15次調査は町営住宅建設に先立って実施され、縄文時代中期後半住居跡1軒、後期初頭～後期前葉住居跡3軒、配石遺構22基、土坑4基が検出された。中期後半住居は土器捨て場の様相を呈しており、完形土器および準完形土器が多量に出土した。第16次調査は町道林線拡幅工事（水特法事業）に先立って実施され、縄文時代中期後半～後期前葉包含層、土坑11基のほか埋没河道が検出された。

第17次調査は平成21年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。トレンチ調査により遺構は検出されなかったが縄文時代中期末～後期前葉包含層が検出された。

この他に第3図におけるA～D地点は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が実施された箇所である⁽²⁸⁾。

A地点は平成16年度に林地区工事用進入路建設工事に先立って実施された。拡幅部分の調査1415㎡であったが、近～現代を含む時期不明の土坑8基と縄文土器、陶磁器片等の遺物が発見された。他に浅間山起源の青灰色を中心とする厚さ3cm程度の火山灰（浅間一泊川テフラ）の一次堆積層が確認された。

B地点は平成19年度に国道145号線及び町道新設工事に先立って実施された。縄文時代の遺構は前期前半住居跡3軒、中期前半住居跡1軒、土坑30基弱、陥し穴13基が検出された。また調査区の西側長さ100mは中世城郭「林城」にあたり、堀7条と区画された生活面(郭)7か所(第I郭～第VII郭)を発見した。第III郭では中世から近世の掘立柱建物跡7棟を含むピット・土坑群を検出した。第III郭の西を区画する堀では土橋と木橋が発見され土橋の南壁には石垣が5段程度積まれていた。さらに第III郭と第V郭の間には水場遺構のため池2基が発見され、石垣と板材による土留めを伴っていた。調査区東側では一辺60m規模の中世屋敷が発見され、掘立柱建物跡は39棟認定されている。竪穴遺構は3基検出され、うち1基は柱穴を持つ建物で、方形の炉にほぼ完形の内耳鍋が据えられていた。炉の北側床面には2つ折りにされた半円形の紙片（漆紙文書）も発見された。

C地点は平成20年度に国道145号線新設工事に先立って実施された。縄文時代の遺構は前期土坑7基が検出された。中世は林城第I・II郭を調査した。第I郭では整地盛土層が確認され、その下で土坑2基とピット13基が検出された。土坑1基からは馬歯上下と顎の一部が出土した。またピットの配列から掘立柱建物跡が想定された。第II郭は近世以降の改変が著しくピット4基の検出に留まった。第II郭南側では近世礎石建物跡が、北側では土取穴が6基重複して検出された。うち1基からはほぼ全身骨格の馬骨4頭分が出土している。建物跡下位には江戸時代の土坑墓、建物と重複して永楽銭を伴い炭を多く混入する土坑が検出された。

D地点は平成21年度に町道新設工事及び国道取り付け工事に先立って実施された。縄文時代の遺構は調査区西端で前期後半（諸磯式期）の住居跡1軒、竪穴遺構1基、土坑2基が検出された。中近世は竪穴遺構2基、礎石建物跡2棟、掘立柱建物跡9棟、溝7条、土坑48基、ピット609基が検出され、林城の第VII郭の範囲が北側に広がっていることが確認された。

第4節 基本層序

本遺跡の基本層序は第4図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下ようになる。

第I層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。拳大の礫を多く含むが、調査区東側では礫の混入は少ない。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第II層 黒褐色土

いわゆる黒ボク層で、ほとんど混入物は認められない。締まりは強い。

第III層 暗褐色土

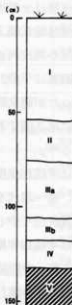
黄褐色軽石を多く含んでおり、縄文時代後期前葉の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。締まりは強い。全体的に茶褐色を呈しているが上位は黒色味が強い。調査区北側に向かってその厚さを増している。

第IV層 暗黄褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

第V層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



第4図 基本土層図(S=1/20)

注

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「群馬県文化財情報システム」Web版 (<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html>) で参照願いたい。本書では第1・2表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 長野原町教育委員会 2000～2010『町内遺跡I～IX』
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第334集
5. 中藤之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
1988『63、石畑岩陰遺跡』『群馬県史』群馬県
笠懸野岩宿文化資料館 2000『第30回企画展 利根川流域の縄文草創期』
原田昌幸 2007『日本の美術No.495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
6. 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡II』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
笠懸野岩宿文化資料館 2004『第39回企画展 底の尖った土器』
7. 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
8. 長野原町教育委員会 1992『長谷II遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
9. 註6と同じ。
10. この傾向は中期中葉(焼町土器)から強く窺うことができる。註6で触れているがそれ以後も何度か取り上げられている。

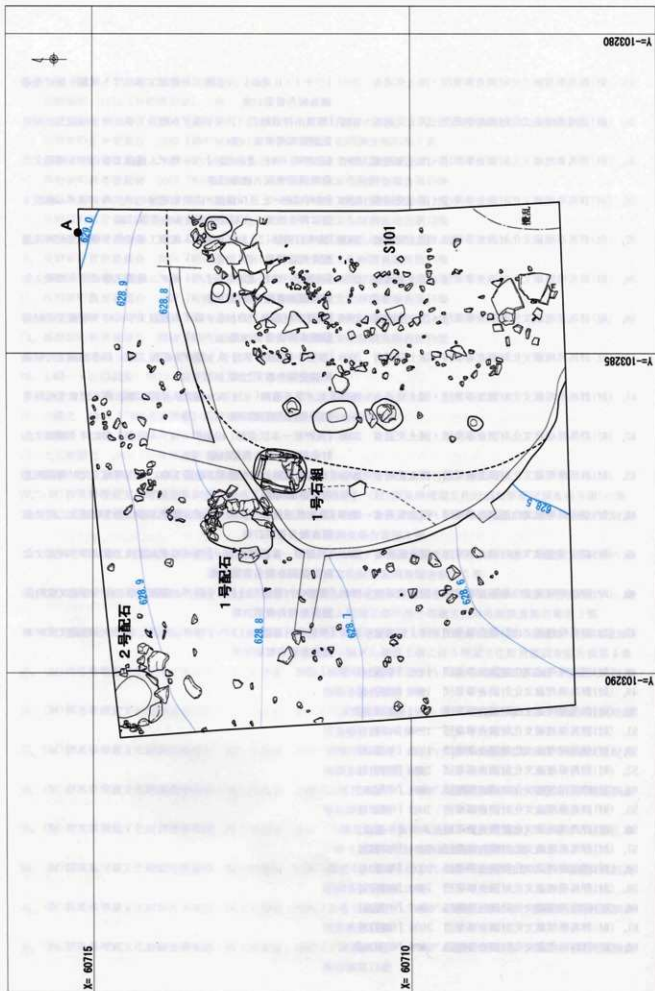
長野原町教育委員会 2003『坪井遺跡V』『町内遺跡II』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集

- 富田孝彦 2004『坪井遺跡』【第77回企画展 新発見考古速報展 群馬発掘情報 石室の入り口を通り抜けると……】群馬県立博物館
- 関根慎二 2008『浅間山を越る縄文土器』【研究紀要26】(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
11. 桜岡正信 1988『64. 勘場木遺跡』【群馬県史】資料編1 群馬県
長野原町教育委員会 1989『長野原町の文化財』
池田政志 1999『勘場木石器時代住居跡』【群馬県遺跡大辞典】上毛新聞社
富田孝彦 2001『勘場木石器時代住居跡』【群馬の史跡(原始古代編)】群馬県教育委員会
12. 長野原町教育委員会 1995『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
13. 長野原町教育委員会 1990『クヌギII遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
笠懸野岩宿文化資料館 1999『第25回企画展 群馬の注口土器』
14. 註12と同じ。
15. 長野原町教育委員会 1998『滝原III遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第6集
16. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
17. 中沢道彦 1998『水1式』の細分と構造に関する試論』【長野県小諸市水遺跡発掘調査資料図譜】第三冊 水遺跡発掘調査資料図譜刊行会
18. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による平成21年度の調査で検出された。また同じ時期に長野原町教育委員会でも隣接地を調査した際、弥生時代中期前半を中心とした竪穴状遺構1基のほか数基の土坑が検出された。
19. 富田孝彦 2000『外輪原I遺跡出土の弥生中期土器』【群馬県考古学手帳】10 群馬土器観会
20. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
かみつけの里博物館 2000『第6回特別展 鍋について考える』
21. 嬭恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』
1994a『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
1994b『延命寺跡発掘調査報告書—浅間焼けにより埋没した寺院—』
22. 長野原町教育委員会 1989『長野原町の文化財』
群馬県立歴史博物館 1995『第52回特別展 天明の浅間焼け』
かみつけの里博物館 2007『第16回特別展 江戸時代、浅間山大噴火』
23. 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
かみつけの里博物館 2007『第16回特別展 江戸時代、浅間山大噴火』
黒澤照弘・大西雅広 2009『茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通』【第19回九州陶磁器学会 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通(関東・東北・北海道編)】
24. 未報告。水特法関連事業に関しては別稿により報告する予定である。なお、現在「背面金剛塔」は雲林寺参道に安置されている。
25. 文獻23、24など。
26. 未報告。概要は以下に詳しい。
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『遺跡は今』第16号
2009『遺跡は今』第17号
27. 本遺跡0地点の資料は「林遺跡」の名称で遺物リスト・調査資料目録が作られ保管されている。
〈考古遺物目録〉資料箱収納リスト:C-b-14、D-b-37 個体資料リスト:b-46
未整理資料収納箱リスト:167
〈調査資料目録〉黒箱収納資料:43-4
群馬大学教育学部編 2004『尾崎喜左雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
28. 未報告。概要は以下に詳しい。
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『遺跡は今』第16号

参考文献 (第1・2表の文献番号に対応)

1. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会 1990「長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—」長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
3. 長野原町教育委員会 1995「柳沢城跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
4. 長野原町教育委員会 2002「町内遺跡Ⅰ」長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
5. 長野原町教育委員会 2003「町内遺跡Ⅱ」長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
6. 長野原町教育委員会 2003「町内遺跡Ⅲ」長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
7. 長野原町教育委員会 2004「町内遺跡Ⅳ」長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
8. 長野原町教育委員会 2004「林宮原遺跡Ⅱ」長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
9. 長野原町教育委員会 2005「町内遺跡Ⅴ」長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
10. 長野原町教育委員会 2006「町内遺跡Ⅵ」長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
11. 長野原町教育委員会 2007「町内遺跡Ⅶ」長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
12. 長野原町教育委員会 2009「町内遺跡Ⅷ」長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
13. 長野原町教育委員会 2010「町内遺跡Ⅸ」長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
14. 小池富治郎編 1936『吾妻郡誌』吾妻教育学会
15. 山崎一・山口武夫 1972『吾妻郡城址史』西毛新聞社
山崎一 1978『群馬県古城址の研究』群馬県文化事業振興会
16. 中隆之 1979「石畑遺跡概報」長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
17. 群馬県 1988『群馬県史』資料編1
18. 上毛新聞社 1999『群馬県遺跡大辞典』
19. 群馬大学教育学部編 2004「尾崎喜左雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録」雄山閣
20. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「長野原久々戸遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第240集
21. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002「長野原一本松遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
22. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002「ハッ場ダム発掘調査集成(1)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
23. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
24. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004「久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
25. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005「横壁中村遺跡(2)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
26. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005「川原湯勝沼遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
27. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006「横壁中村遺跡(3)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
28. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006「立馬Ⅱ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
29. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006「上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
30. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006「横壁中村遺跡(4)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
31. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006「立馬Ⅰ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
32. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007「下原遺跡Ⅱ」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

33. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
34. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007「横壁中村遺跡(5)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
35. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007「長野原一本松遺跡(2)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
36. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「幸神遺跡・上原IV遺跡・山根III遺跡(2)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
37. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「榎木II遺跡(1)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
38. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「長野原一本松遺跡(3)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
39. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「横壁中村遺跡(6)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
40. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「横壁中村遺跡(7)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
41. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「上ノ平I遺跡(1)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
42. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008「長野原一本松遺跡(4)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
43. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009「立馬III遺跡」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
44. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009「榎木II遺跡(2)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
45. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009「長野原一本松遺跡(5)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
46. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009「横壁中村遺跡(8)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
47. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009「横壁中村遺跡(9)」ハット場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
48. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995「年報14」
49. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996「年報15」
50. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997「年報16」
51. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「年報17」
52. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「年報18」
53. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「年報19」
54. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001「年報20」
55. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「年報21」
56. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003「年報22」
57. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004「年報23」
58. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005「年報24」
59. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006「年報25」
60. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007「年報26」
61. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008「年報27」
62. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009「年報28」



第5図 林中原I遺跡IV全体図 (S=1/60)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴式住居

SI01 (第6～34図/PL1～3、5～17)

位置 調査区南東側

重複関係 1号石組と重複し、これを切っている。

遺存状態 一部畑の耕作により攪乱を被っているが遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 部分調査のため住居の全体像は明確ではないが、主体部と柄部からなる柄鏡形敷石住居と考えられる。今回の調査区では主体部のおよそ西側半分が検出された。主体部は副軸が長い楕円形を呈すると考えられる。住居跡は調査区東側と南東側に延びており、大形の部類に入るのであろう。主体部の規模は現況で主軸6.2m (推定7.0m)、副軸4.1m (推定9.0m)、床面積23.0㎡を測る。

主軸方位 北北東を示す。

床面 敷石を施していた痕跡が認められる。敷石は北側と南側で長さ40～50cm、幅20～40cmの扁平な板状石が一部残されていたが大部分は片づけられている。板状石と板状石の間に充填されていたと考えられる円礫や角礫が遺存していることからほぼ全面に板状石が敷設されていたと推測される。

壁・壁高 壁は北壁および南西壁で掘り込みが確認されたほか、西壁は範囲が明確に捉えることができなかった。壁高は北壁で36cm、南西壁で28cmを測り、やや外傾して立ち上がっている。壁溝は認められていない。

柱穴 敷石の外側、壁に沿ってP1～P6まで確認されている。平面形は楕円形～隅丸長形を基調とする。主軸に近いP1は床面からの深さが87cmと深く主柱穴といえよう。おそらく同規模の主柱穴が調査区外東側で対になっていると推測される。それぞれの規模を以下に記す。

炉跡 未検出である。

第3表 SI01柱穴計測表

その他の施設 なし。

遺物検出状況 覆土上層(第

6図1層)でレンズ状に多量

の土器・石器が出土しており、

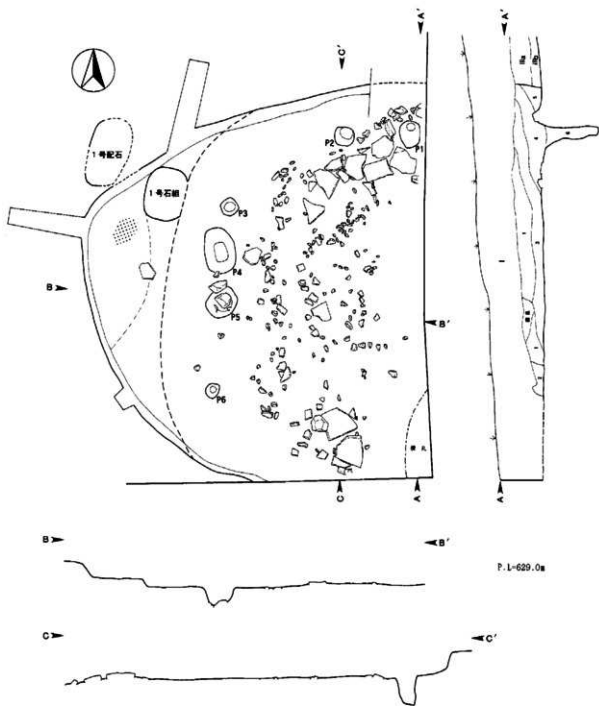
いわゆる「土器捨て場」の様

相を呈している(第7～13図)。廃棄された土器や石器に混じて炭化材・骨片が顕著に認められた。またそれとは別に床面直上の遺物も出土しており、住居跡の廃絶時期を示していると考えられる。

遺物 総出土量は土器片(個体・土製品含む)2,567点(77,242g)、石器(剥片含む)154点(25,479g)である。そのうち、土器218点(うち復原土器51点、破片土器160点、土製円板7点)、石器18点(うち剥片石器類5点、石錘1点、打(磨)製石斧類2点、礫石器類10点)を図示し得た。

時期 住居の廃絶時期に近い遺物は床面直上出土の第14・15図1～4で、それに伴うと考えられる遺物は第15図5～8、第26～28図が該当し、堀之内1式新段階を主体とし、一部堀之内2式古段階までの時期に比定される。また一括廃棄遺物は床面とは間層をもっていることから区別できる。第16～24図、第

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
長軸(cm)	40	32	30	72	50	25
短軸(cm)	32	28	28	50	42	20
床面からの深さ(cm)	87	42	35	28	27	35



P.L-629.0m

S101土層説明

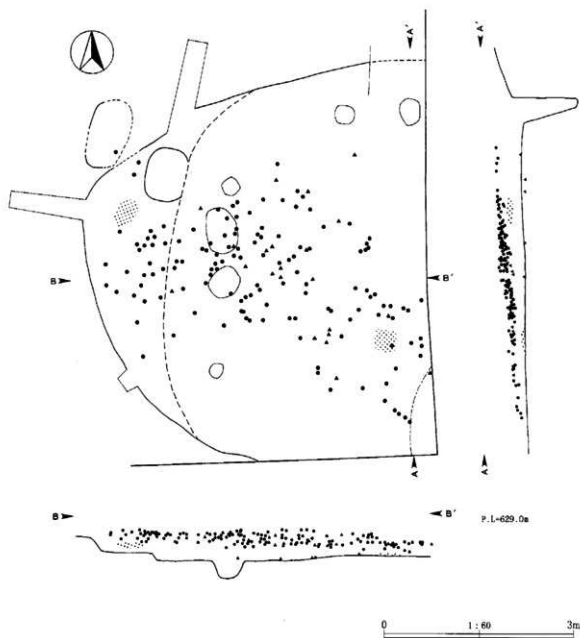
AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を散置、軽石粒・炭化材を少量、 $\phi \sim 5$ cm大の礫、土器片を多量に含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を散置含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を散置、軽石粒・炭化粒を多量に含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒・ $\phi \sim 1$ cm大のロームブロックを多量に含む。
6. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・ $\phi \sim 3$ cm大のロームブロックを多量に含む。

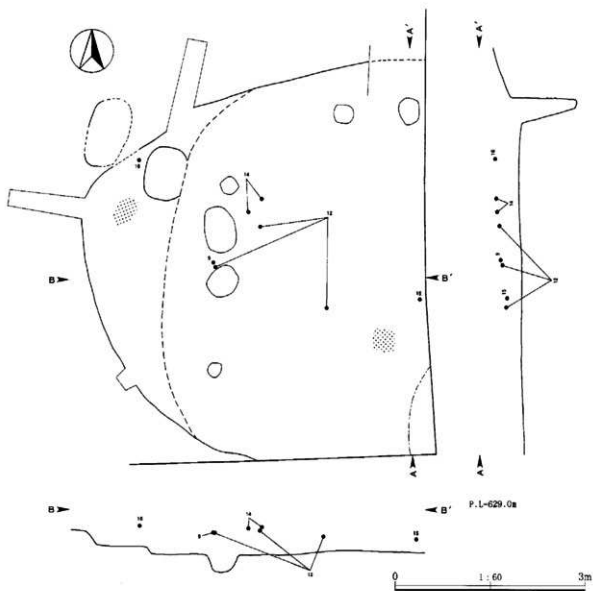
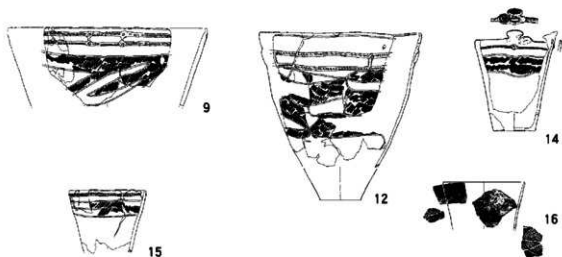
0 1 3m
1 : 60

第6図 S101実測図 (S = 1/60)

29～31図が該当し、堀之内2式中段階を主体とし、一部加曾利B1式までの時期に比定される。遺物の出土状況に関しては第5章第1節に詳述したので参照していただきたい。



第7図 SI01遺物出土状況図1[全体] (S = 1/60)



第8図 SI01遺物出土状況図2〔精製深鉢1〕(S = 1/60)



17



20



21



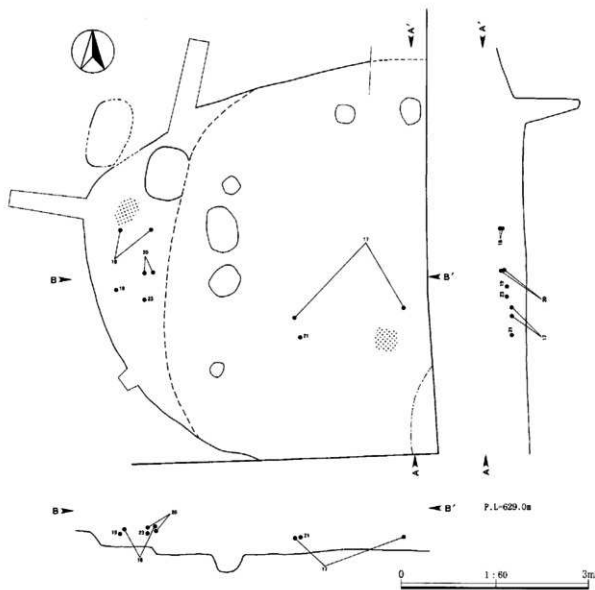
18



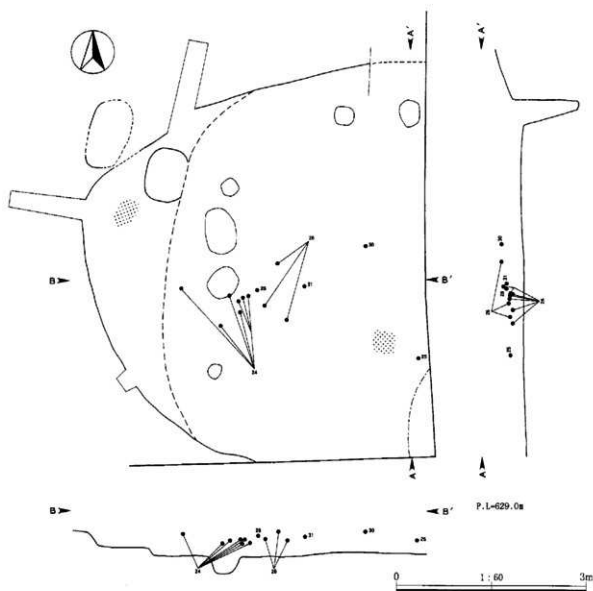
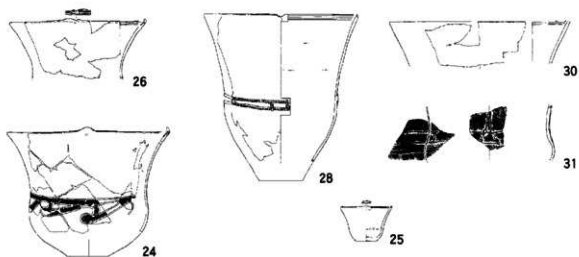
19



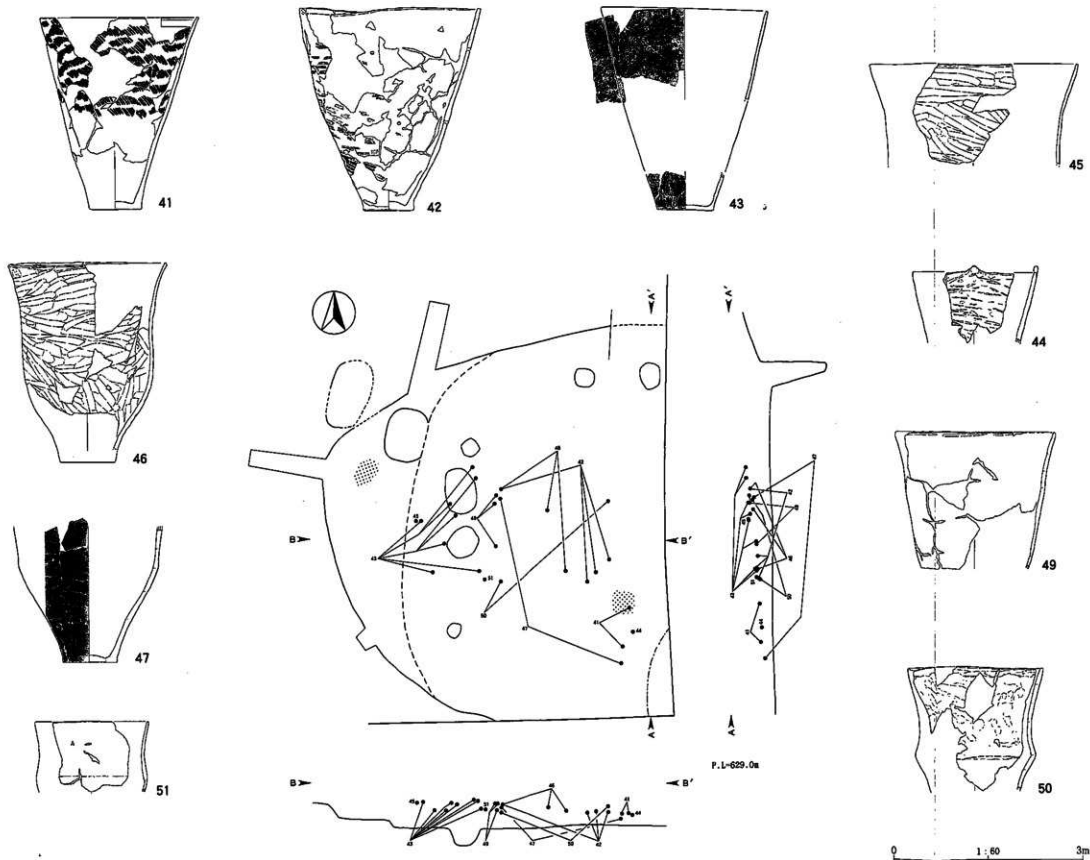
23



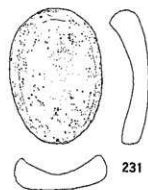
第9図 SI01遺物出土状況図3 [精製深鉢2] (S = 1/60)



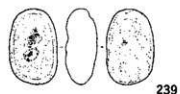
第10図 S101遺物出土状況図4 [精製深鉢3] (S = 1/60)



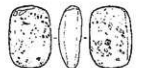
第11図 S101遺物出土状況図5 [粗製深鉢] (S = 1/60)



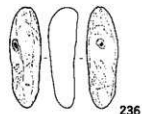
231



239



232



236



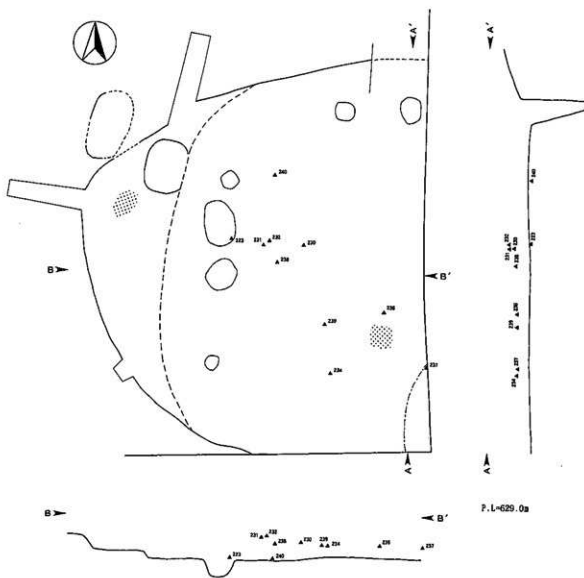
237



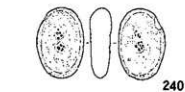
223



230



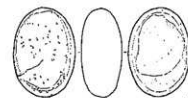
P.L-629.0a



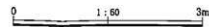
240



234

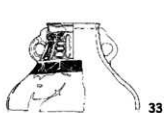


238



第12図 SI01遺物出土状況図6 [石器] (S = 1/60)

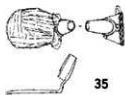




33



40



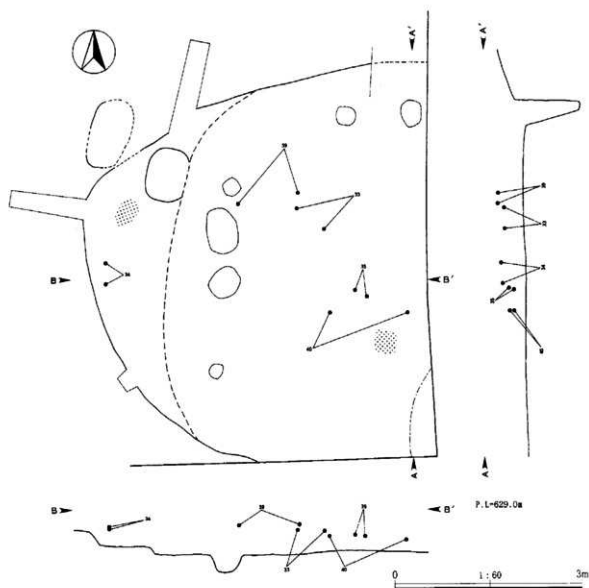
35



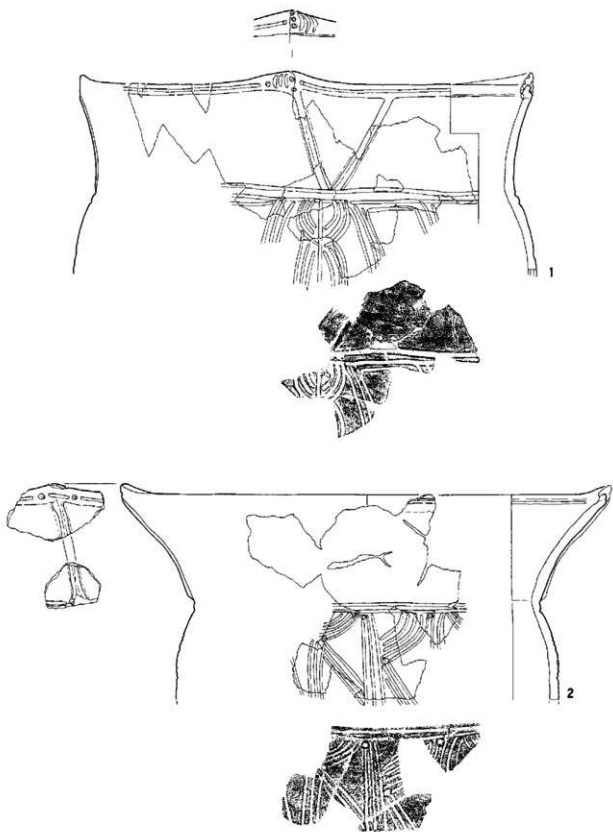
34



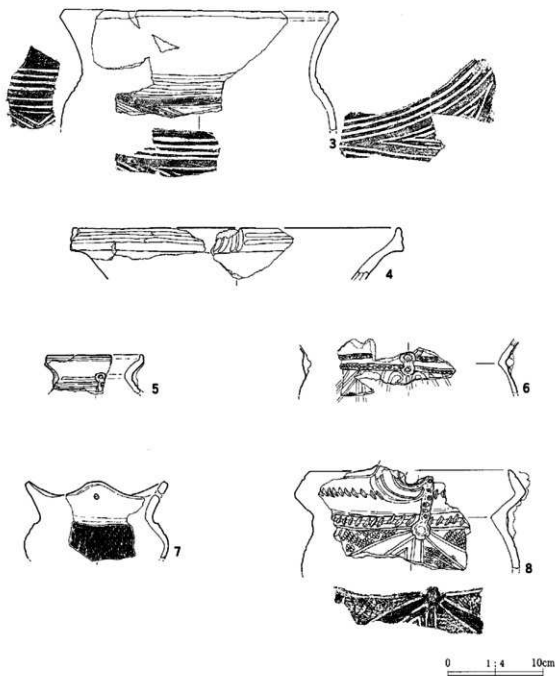
39



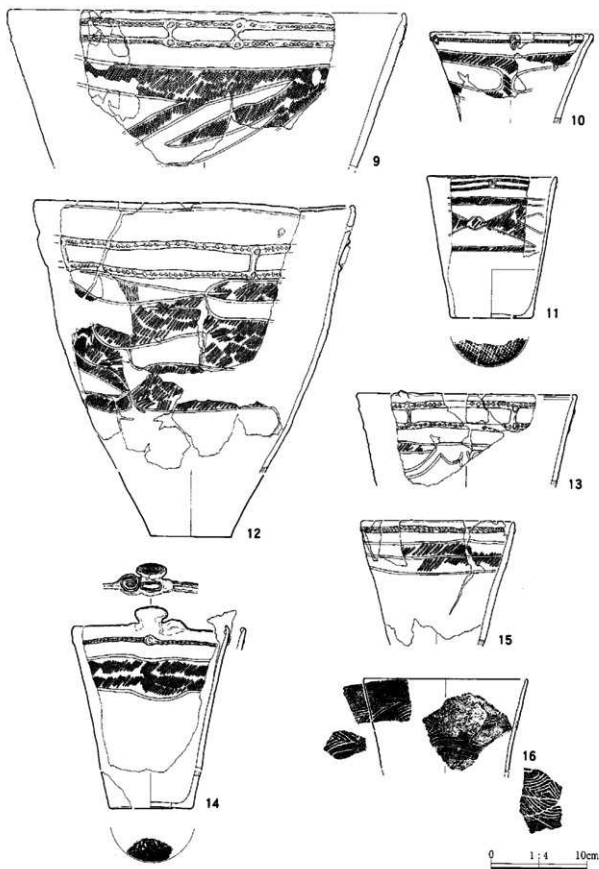
第13図 S101遺物出土状況図7 [注口土器] (S = 1/60)



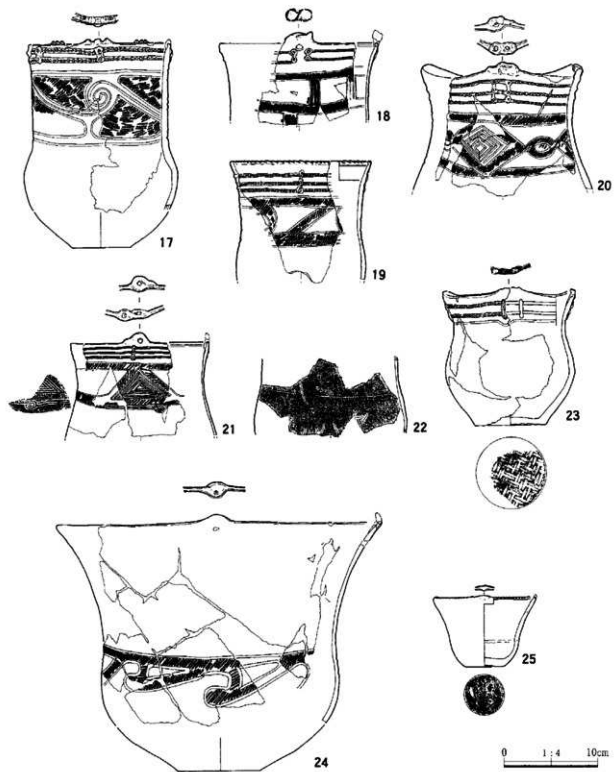
第14図 SI01出土遺物実測図1 (S=1/4)



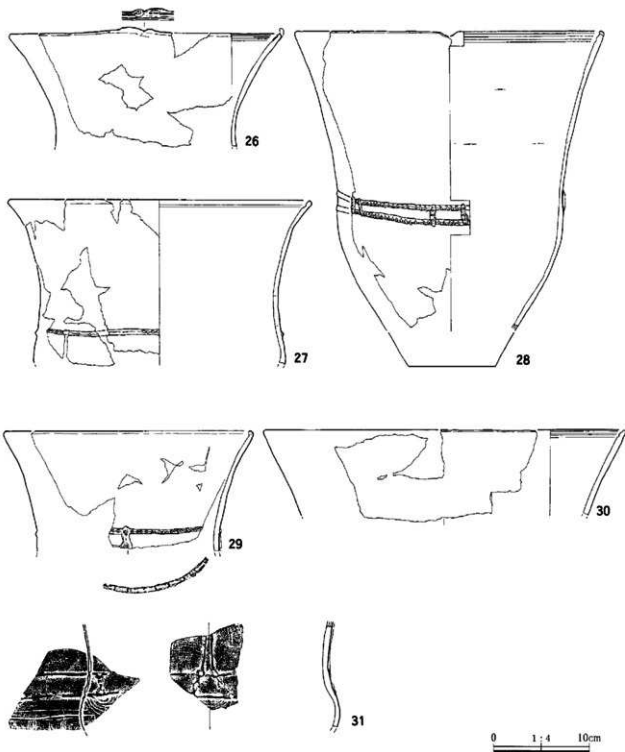
第15図 SI01出土遺物実測図2 (S = 1/4)



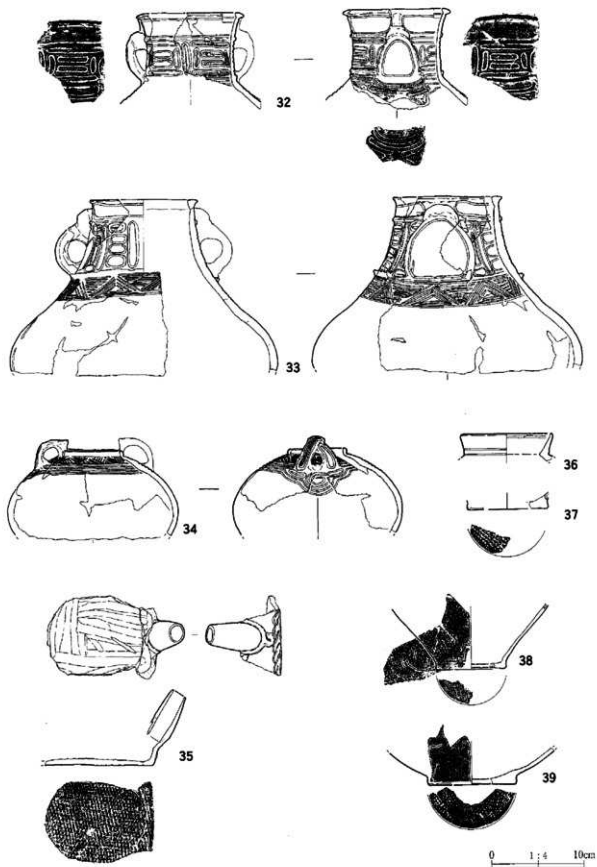
第16図 SI01出土遺物実測図3 (S = 1/4)



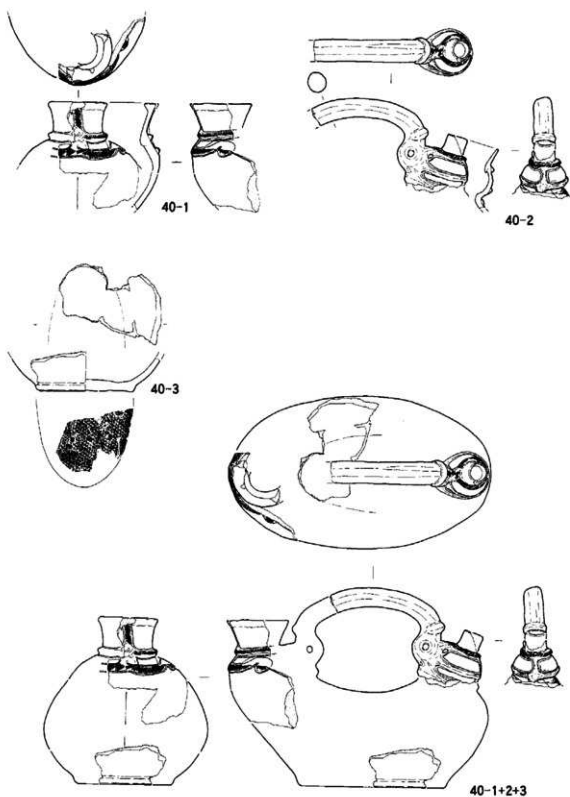
第17图 SI01出土物実測图4 (S = 1/4)



第18図 S101出土遺物実測図5 (S = 1/4)

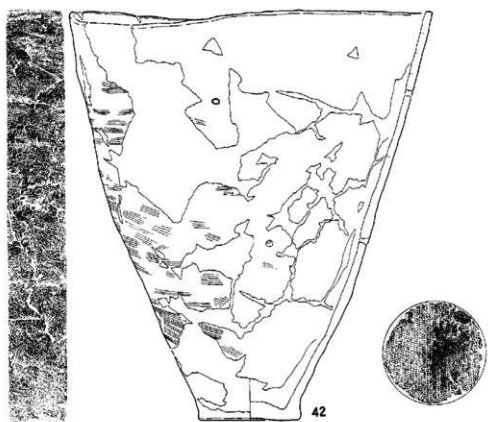
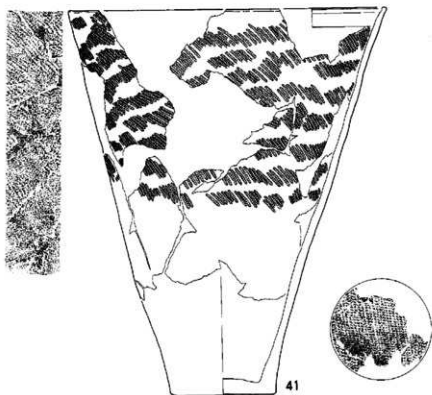


第19图 SI01出土遺物実測図6 (S=1/4)



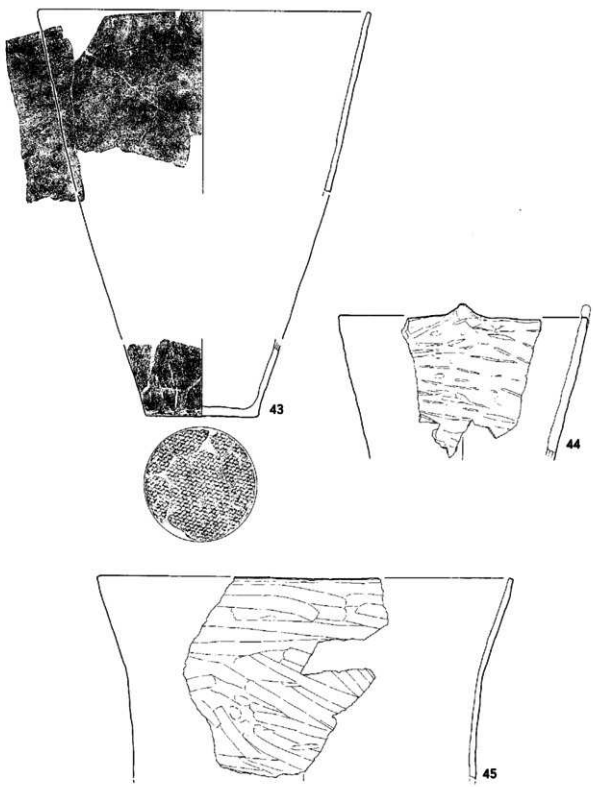
0 1:4 10cm

第20图 SI01出土遺物実測図7 (S=1/4)

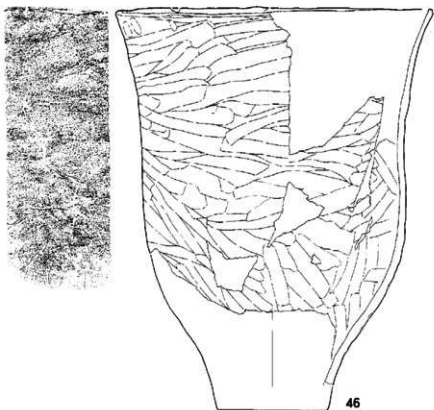


0 1:4 10cm

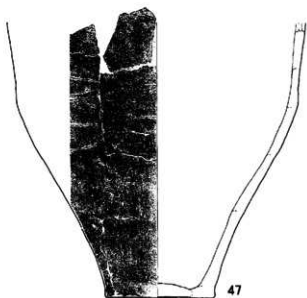
第21図 SI01出土遺物実測図8 (S = 1/4)



第22図 SI01出土遺物実測図9 (S = 1/4)



46

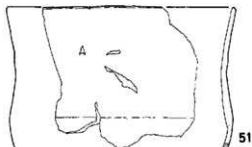
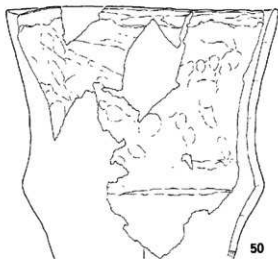
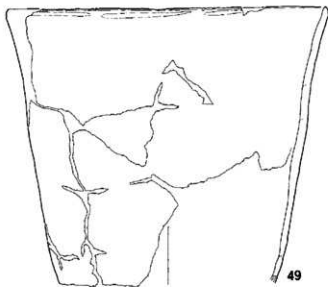


47



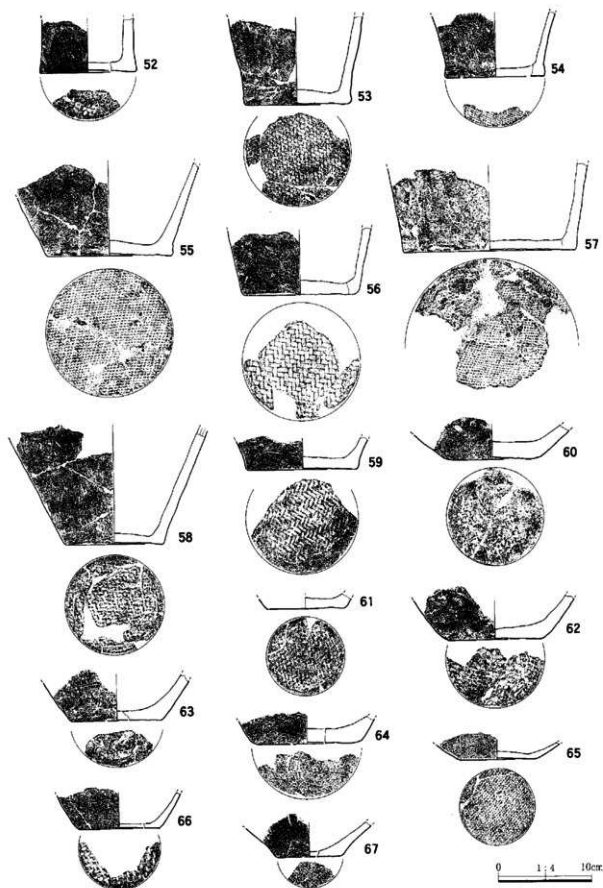
0 1:4 10cm

第23图 SI01出土遺物実測図10 (S = 1/4)

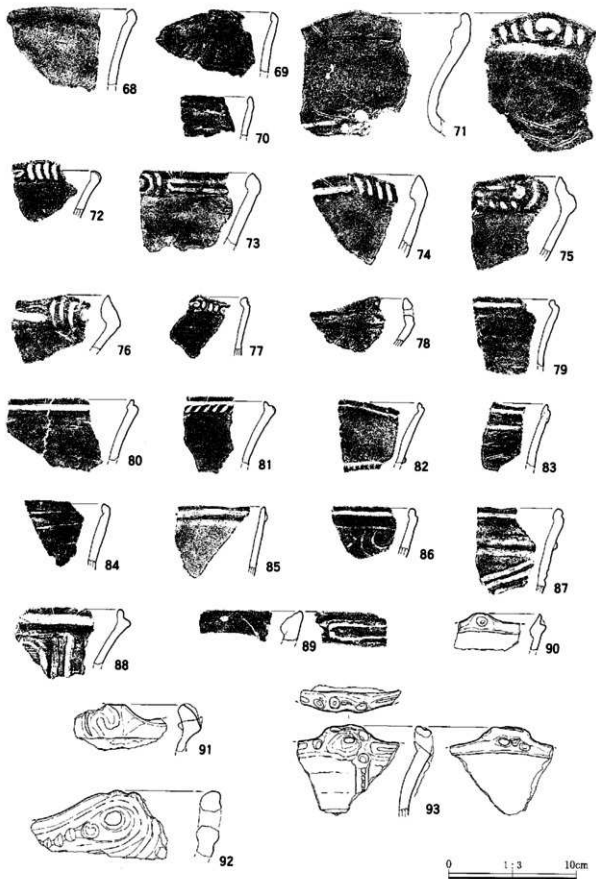


0 1:4 10cm

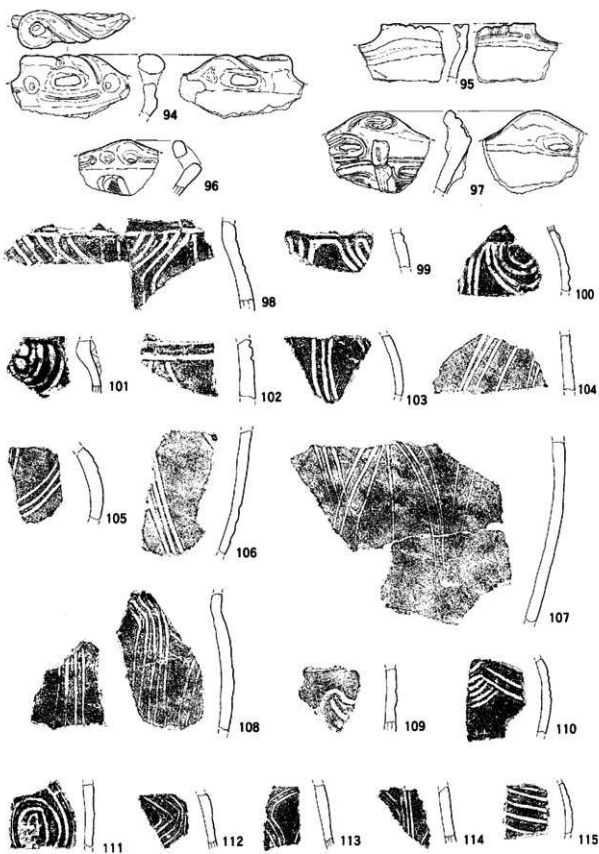
第24図 SI01出土遺物実測図11 (S = 1/4)



第25圖 SI01出土遺物実測圖12 (S = 1/4)

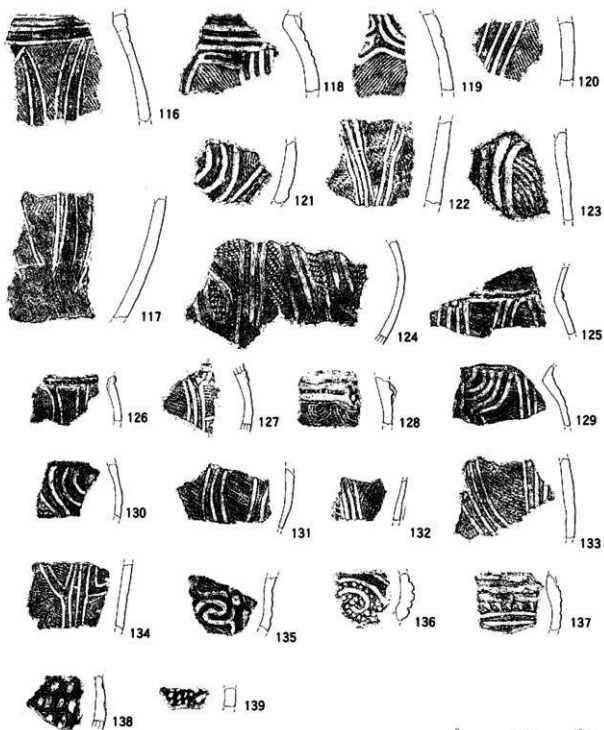


第26图 SI01出土遺物実測図13 (S = 1/3)

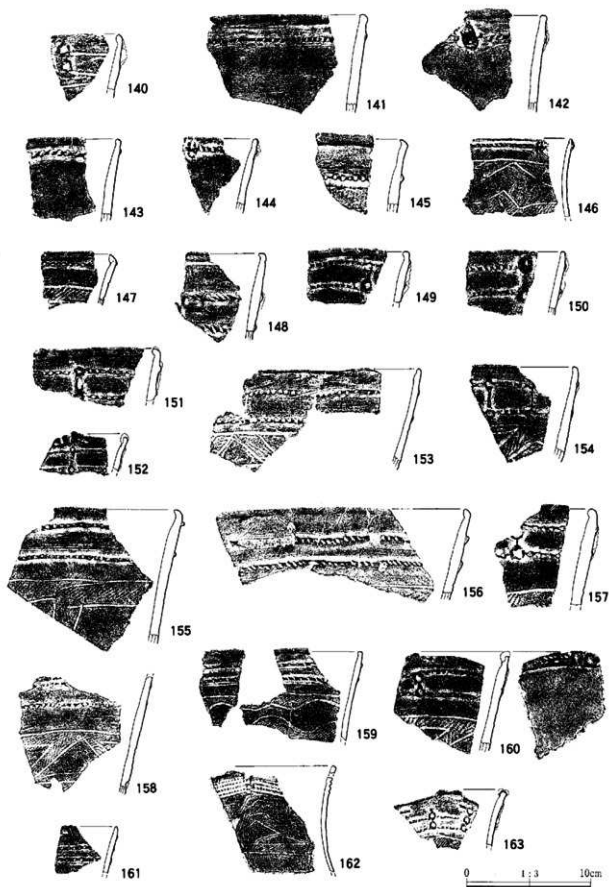


0 1:3 10cm

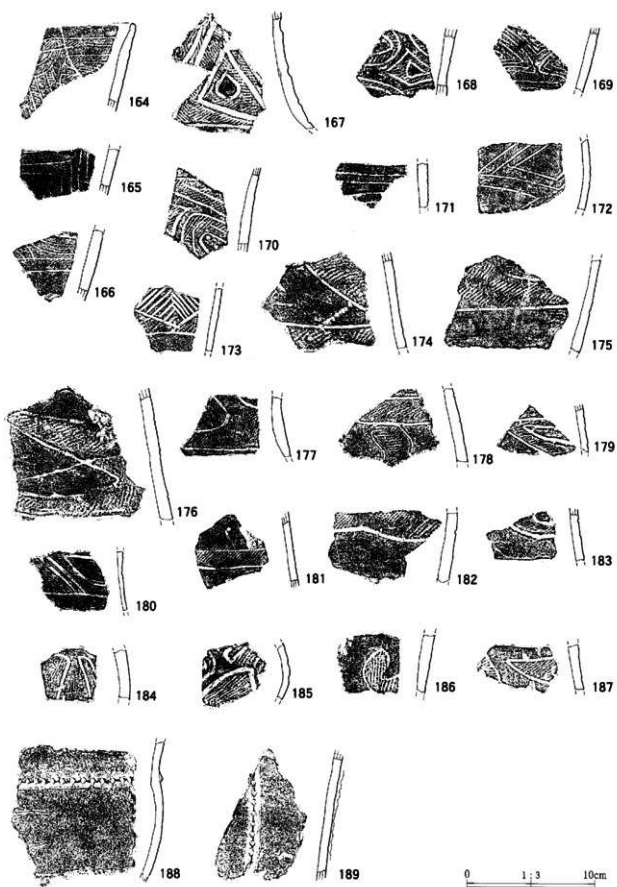
第27图 SI01出土遺物実測図14 (S = 1/3)



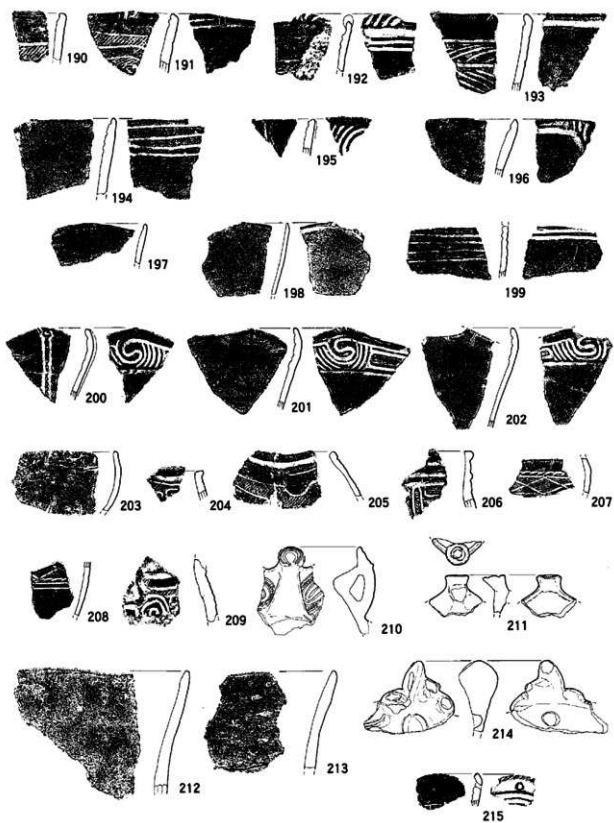
第28图 S101出土遗物实测图15 (S = 1/3)



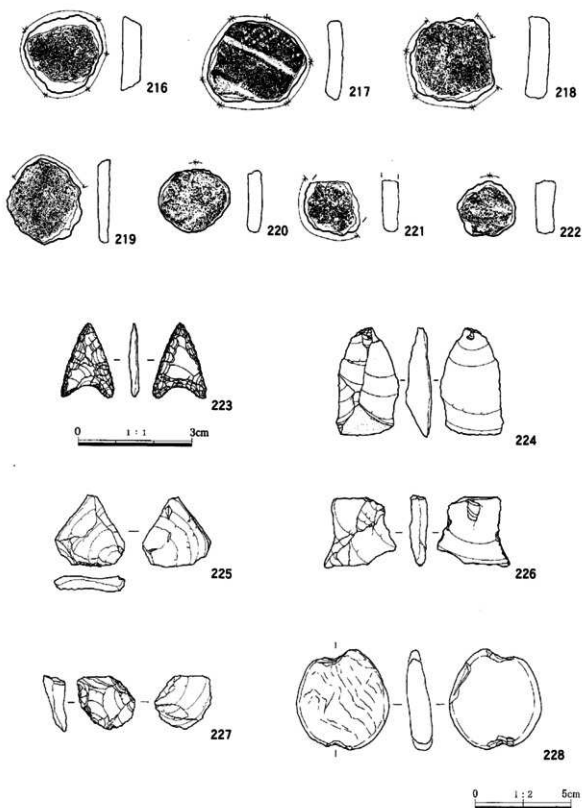
第29図 SI01出土遺物実測図16 (S = 1/3)



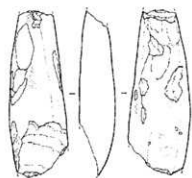
第30圖 S101出土遺物実測圖17 (S = 1/3)



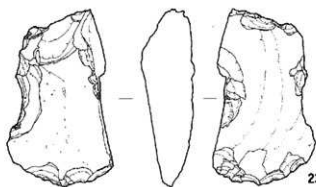
第31图 SI01出土物実測图18 (S = 1/3)



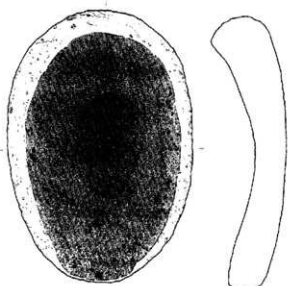
第32图 S101出土遺物実測図19 (S = 1/2 · 1/1)



229

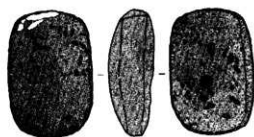


230

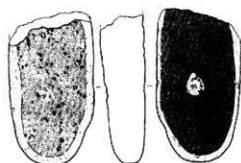


231

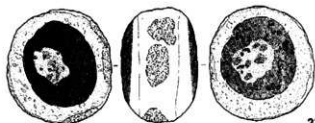
0 1 4 10cm



232



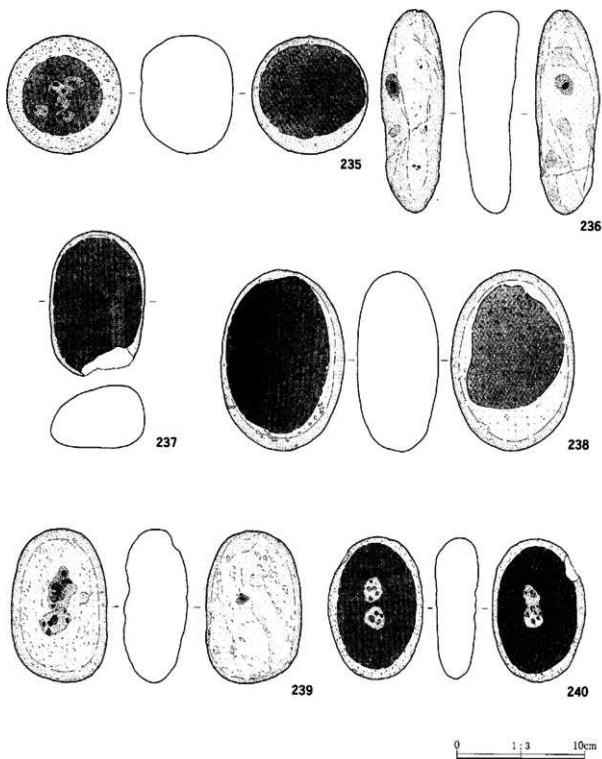
233



234

0 1 3 10cm

第33図 SI01出土遺物実測図20 (S = 1/3 · 1/4)



第34图 SI01出土遺物実測図21 (S = 1/3)

第2節 配石遺構・石組遺構

1号配石 (第35・36図/PL3・17)

位置 調査区中央北寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸110cm、短軸64cm、確認面からの深さ90cmを測る。

周囲に拳火〜人頭大の角礫が配され、最上層には長さ64cm、幅50cmの扁平板状石が含まれていた。

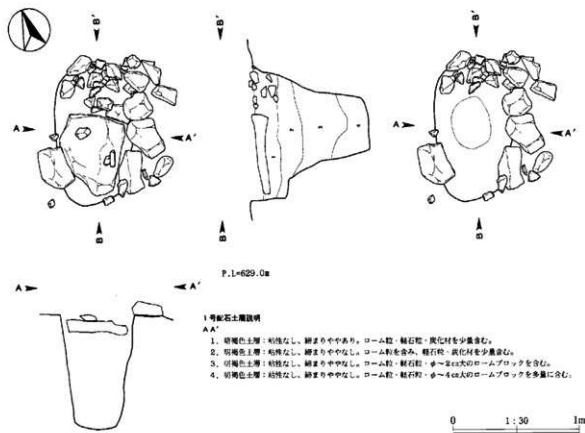
主軸方位 N-15°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

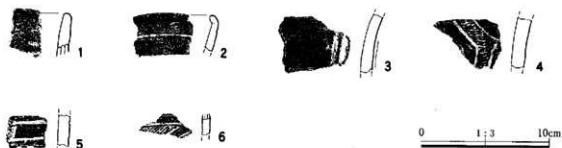
底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器18点 (285g) でうち6点を図示し得た。

時期 堀之内2式期。本遺構は掘り方をみると、確認面からの深さが一般的な配石遺構の範疇を超えており、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い。



第35図 1号配石実測図 (S = 1/30)



第36図 1号配石出土遺物実測図 (S = 1/3)

2号配石 (第37・38図/PL4・17)

位置 調査区北西隅。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 全体の4分の3の検出であるが、平面形は楕円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸70cm、確認面からの深さ55cmを測る。周囲に拳大～人頭大の角礫が配されている。

主軸方位 N-4°-E

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器17点 (252g)、石器2点 (31,500g) でうち6点を図示し得た。

時期 堀之内2式期か。遺物量が少ないが当該期に比定しておく。本遺構も1号配石と同様に確認面からの深さが一般的な配石遺構の範疇を超えており、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いといえる。

1号石組 (第39図/PL4)

位置 調査区中央。

重複関係 SI01と重複し、これに切られている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

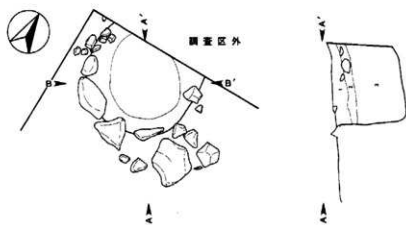
平面形と規模 住居跡石囲炉の様相を呈している。掘り方は平面形が隅丸長方形を呈し、規模は長軸82cm、短軸64cm、深さ45cmを測る。扁平な板状石を用いて石囲い構成している。

主軸方位 N-6°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈す。

遺物 炭化材が1点出土しているのみである。この炭化材を放射性炭素測定法で分析した結果、縄文時



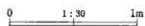
P.L-629.0a



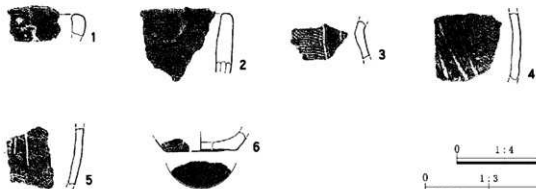
2号配石土層説明

AA'

1. 暗褐色土層：粘質なし。締まりややあり。コーム粒を散見。軽石粒を少量含む。
2. 暗褐色土層：粘質なし。締まりややなし。コーム粒・軽石粒・炭化物を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘質なし。締まりややなし。コーム粒・軽石粒・φ〜3mm大のコームブロックを多量に含む。



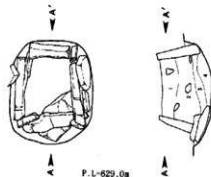
第37図 2号配石実測図 (S = 1/30)



第38図 2号配石出土遺物実測図 (S = 1/3 · 1/4)

代中期後半の測定結果が得られた(第4章第2節)。本遺構は調査時に本遺構南側にはほぼ同じ検出面で平石および焼土が検出されており、住居跡の炉跡として調査を進めたが、覆土に焼土が認められなかったことやサブトレにおいても遺構の広がり判断する材料が認められなかったことから石組遺構としたものである。ただし、この測定結果から、調査区全体が中期後半の竪穴式住居跡であったことが推測される。前回の概要報告で「炭化物が皆無」としたことは、この場を借りて訂正したい。

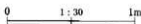
時期 中期後半。



1号石組土層説明

AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を少量、炭化粒を含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒・炭化粒を少量含む。
3. 黄褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を含み、軽石粒・炭化粒を少量含む。
4. 黄褐色土層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒・φ~2cm大のロームブロックを少量を含む。



第39図 1号石組実測図 (S = 1/30)

第3節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土及び遺構内の流れ込み遺物、サブトレ出土遺物を一括して取り扱う。遺構外出土遺物は縄文時代前期末～後期中葉までの時期のものが認められる。

1. 土 器

以下の6群に大別する。

第I群 縄文時代前期終末土器を一括する。

第40図1のみで半截竹管により横線・弧線を施している。

第II群 縄文時代中期後半加曾利E式を一括する。

第40図2～7で加曾利E3式新段階に比定されるものが多い。

第III群 縄文時代後期初頭称名寺式を一括する (第40図8～14)。

J字状文を施す類 (第40図8～10) が特徴的である。8が称名寺1式、9・10が称名寺2式。圧痕隆帯をもつ類 (第40図11) や細密条線を施す類 (第40図12～14) も中期後半～後期前半にかけて認められるがここに一括しておく。

第IV群 縄文時代後期前葉堀之内式を一括する (第40図15～第42図76)。さらに2細分する。

IV-1群 堀之内1式に比定されるもの (第40図15～第41図34)。

深鉢の口縁部で口唇部を内屈させ内屈部外面に幅広の横位沈線や弧線を施す類(15～18)でその波状突起部(19・20)である。21～31は襷状に交叉する3条単位以上の結束状の意匠を基礎とする懸垂文構成の体部片で、26～31は縄文を地文とするものである。32～34は幅広沈線で区画された中を充填縄文するものである。

IV-2群 堀之内2式に比定されるもの (第41図35～第42図76)。

35～38は深鉢の口縁部で口唇部内面の形状から本群に下ると判断した。36は縄文地に3本単位の沈線を垂下させ、それらを横位に連結する文様構成である。39～53は口縁部外

面に8字状貼付文を重ねた数条の有刻隆線を巡らせ、体部に帯縄文や杵状文などの磨消縄文による文様構成をとる類である。いわゆる朝顔形のものとは体部が膨響するものの2形態があるが、破片だと判断が難しい。41・46は前者であるが、その他は後者の可能性が高い。41・49は渦巻文+斜行文、46・47は帯縄文を重畳させ古い様相を呈している。その他48は対弧文、53は三角文で区画内は沈線で充填するものである。45は波状口縁で非常に細い隆線と8字状貼付文が一体化しており新しい様相を呈する。54~57は器壁を薄く内面文が発達した小形~中形の深鉢・鉢の口縁部である。58は口縁部から頸部に有刻隆線を垂下、巡らせる無文の鉢と思われる。59~61は小突起である。62~71は注口土器片である。62は橋状把手、63は環状把手、64~70は体部片で64は入組弧線文、65はΩ状文、66・67は渦巻状弧線文で66は間に細密斜行線を施している。68は重弧文、69は刺突列、70は隆線上に縄文を施し、その上を沈線でなぞっている。第20図40の釣手付き注口土器の文様描出と同じである。71は底部付近で鍵の手文か。72は大形深鉢の口縁部で外面は縄文地に有刻隆線を垂下させている。73~76は粗製深鉢の口縁部で73は調整痕が顕著である。

第V群 縄文時代後期中葉加曾利B式を一括する(第43図77~81)。

77は区切り文が認められることから本群に入れた。大形粗製深鉢の口縁部であろう。78~80はこの時期特有の中・小形精製深鉢である。81は格子状の文様から本群に入れた。

第VI群 底部を一括する(第43図82~87)。

82・83は張り出し底部、84・85は直立気味に、86・87は外傾して立ち上がるものである。底面に網代圧痕を残すものが多いのが特徴的である。

2. 土製品

(1) 土鉢(第43図88)

88のみが確認された。一対の糸掛け部を有し、その他は研磨されている。

(2) 土製円板(第43図89~91)

いずれも深鉢の体部を転用したもので、91は全面研磨である。

3. 石器

(1) 剥片石器類(第44図92・93)

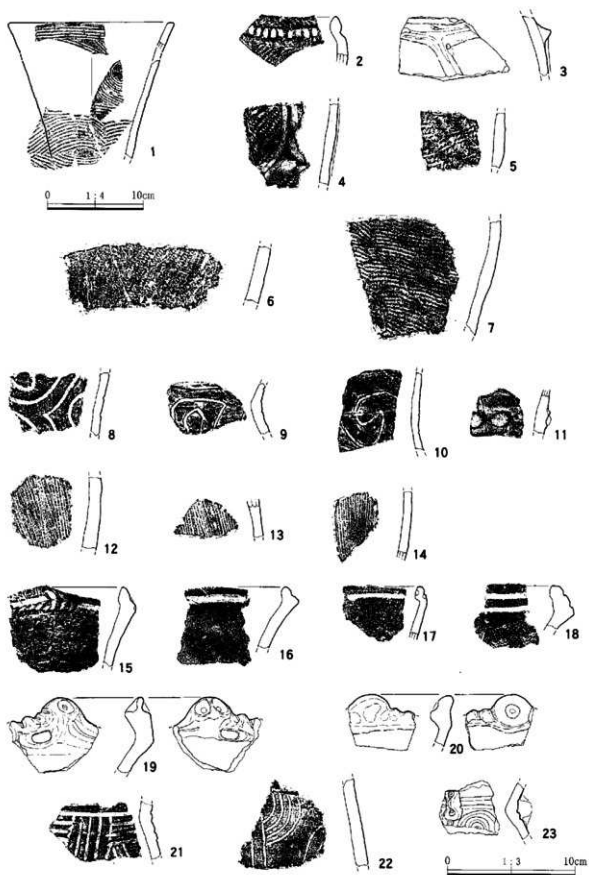
いずれも二次加工痕ある剥片で、93は石鏃未製品の可能性もあろう。石質は珪質変質岩である。

(2) 打製石斧類(第44図94・95)

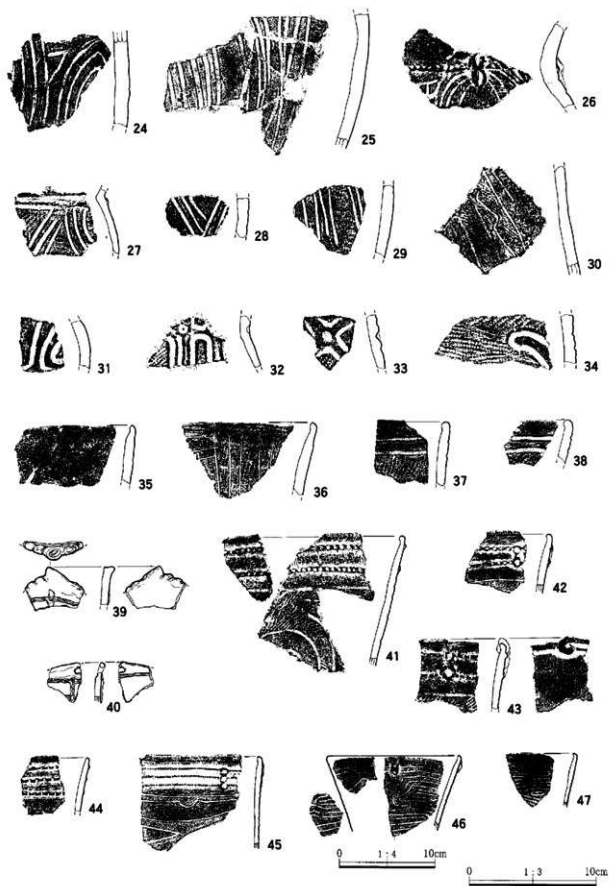
94は剥片95は打製石斧の未製品である。

(3) 礫石器類(第44図96~98)

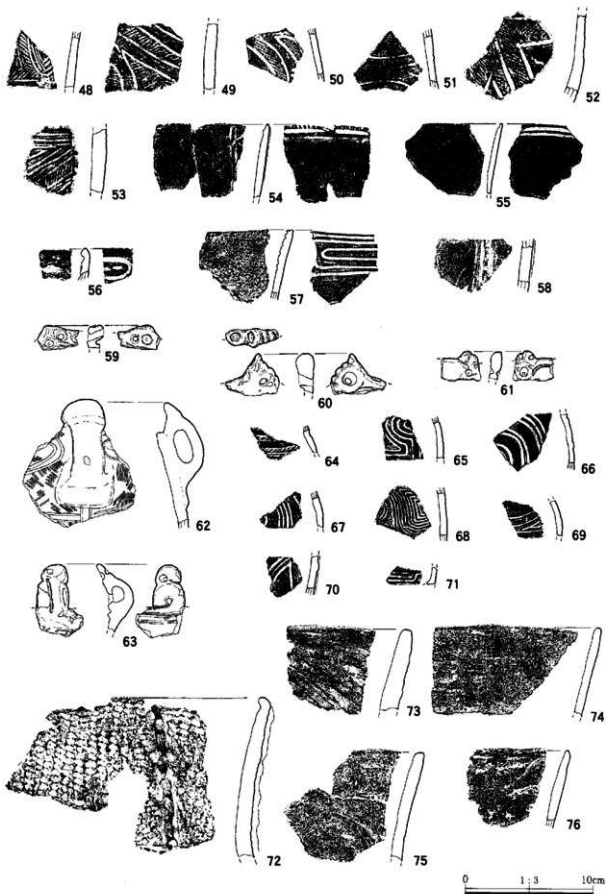
96は多孔の凹石で裏表に37孔認められる。97・98は磨石+凹石の複合石器である。



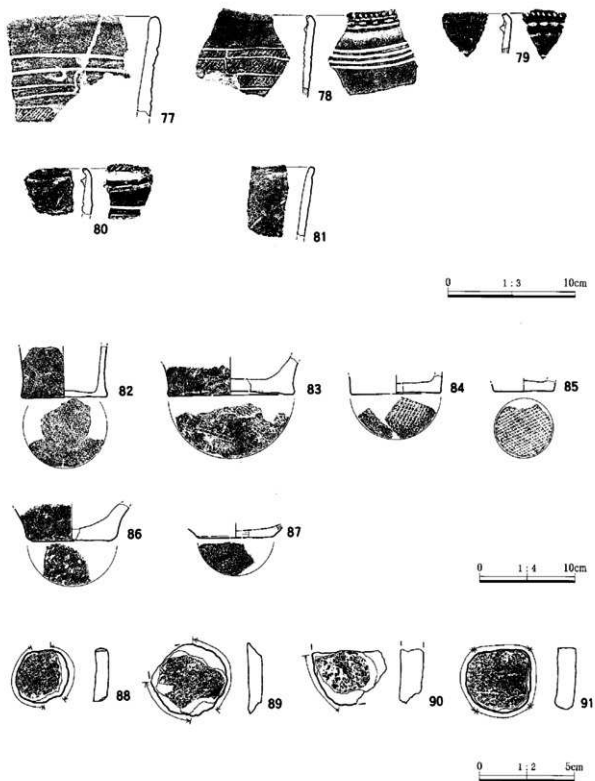
第40图 遺構外出土遺物実測図1 (S=1/3・1/4)



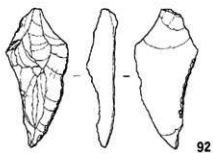
第41图 遗物外出土遺物実測図2 (S = 1/3 · 1/4)



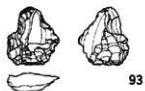
第42圖 遺構外出土遺物実測図3 (S=1/3)



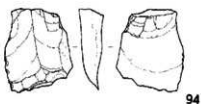
第43図 遺構外出土遺物実測図4 (S = 1/2・1/3・1/4)



92



93

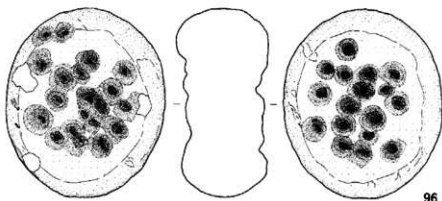


94

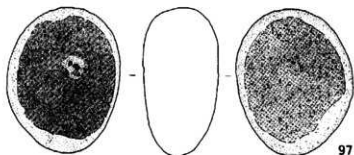


95

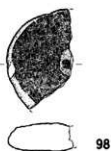
0 1:2 5cm



96



97



98

0 1:3 10cm

第44图 遺構外出土遺物実測図5 (S=1/2・1/3)

第4章 自然科学的分析

第1節 出土炭化材樹種同定

野村敏江（パレオ・ラボ）

1. はじめに

群馬県長野原町大字林字中原に位置する林中原Ⅰ遺跡は、吾妻川の左岸段丘上の標高約629mに位置する。ここでは縄文時代後期の住居址（SI01）から出土した炭化材5点の樹種同定結果について報告する。また、同一試料を用いて放射性炭素年代測定が実施されている（詳細は別報を参照）。

2. 炭化材樹種同定の方法

炭化材樹種同定を実施する炭化材を選び出す際には、材の3方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成することが可能な大きさの炭化材を選び出した。クリについては実体顕微鏡下で観察を行うことが可能なため、写真撮影を行う試料以外についてはこの時点で同定を行なった。次に、走査電子顕微鏡写真を撮影するため、材の3方向の断面を作成し材組織を観察、撮影した。走査電子顕微鏡用の試料は3断面を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料台を作成した。この後試料台を乾燥させ、金蒸着を施し走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版（第45図）を添付し、同定結果を記載した。

3. 結果

各試料の樹種同定結果の一覧を第4表に示した。同定の結果、クリ4点と、組織構造から植物と考えられるが材ではない植物が1点認められた。日本各地においてクリが建築材や燃料材に縄文時代に多用される例は千野（1991）で示されており、本遺跡での同定結果もこれらの分析結果とも対応するものであった。

次に同定された樹種の材組織について記載を行なう。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第45図（1 a-1 c SI01表土-1）

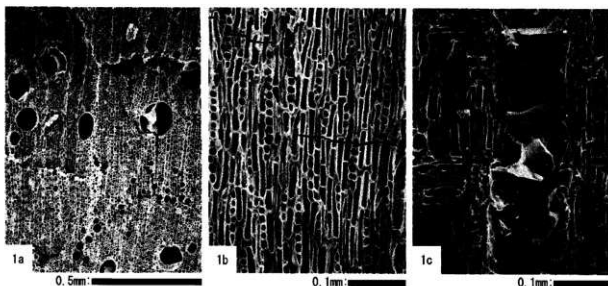
大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた道管が火災状に配列する環孔材。放射組織は単列で同性である。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は櫛状である。クリは北海道（石狩・日高地方以南）・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木で高さ20mほどになる。材は耐朽性が強く、水湿に耐え、保存性はきわめて高い。

引用文献

千野裕道(1991)縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物遺物からの検討—,「東京都埋蔵文化財センター—研究論集 X」:215-249, 東京都埋蔵文化財センター。

第4表 出土炭化材の樹種同定結果

試料名		樹種	PLD番号	
HNI-4	SI01	上	クリ	PLD-7006
	SI01	石組	クリ	PLD-7007
	SI01	北壁	同定不可	PLD-7008
	表土-1		クリ	PLD-7009
	表土-2		クリ	PLD-7010



1a-1c: クリ (I4 SI01表土-1)
a: 横断面 b: 縦断面 c: 放射断面

第45図 出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香・野村敏江

1. はじめに

長野原町に位置する林中原 I 遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。試料の観察と抽出は野村、試料調製は山形、瀬谷、Lomtadidze、Jorjoliani が、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は佐々木、伊藤が作成した。また年代測定試料と同一試料で樹種同定が行われた (詳細は第1節参照)。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第5表のとおりである。試料は5点ですべて敷石住居跡（SI01）内から出土した炭化材もしくは炭化植物遺体である。住居跡内で床面直上から出土した土器型式は堀之内1式、中層から上層にかけて一括廃棄された土器型式は堀之内2式〜加曾利B式と考えられている。遺物No.2が出土した住居跡内の石組遺構は、調査時の所見では敷石住居跡に伴わない可能性も考えられている。また遺物No.1と3は骨片と共に取り上げられた炭化材で、住居跡北側の確認面付近からの出土である。遺物No.4-1と4-2は土器廃棄土中からの出土である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第5表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-7006	位置：I 4 遺構：SI01 上 遺物No：1	試料の種類：炭化材（クリ：12年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7007	位置：I 4 遺構：SI01 石組 遺物No：2	試料の種類：炭化植物材（クリ：1年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7008	位置：I 4 遺構：SI01 北壁 遺物No：3	試料の種類：炭化植物遺体（草本植物） 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.2N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7009	位置：I 4 遺構：SI01 遺物No：4-1 層位：表土①	試料の種類：炭化材（クリ：3年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7010	位置：I 4 遺構：SI01 遺物No：4-2 層位：表土②	試料の種類：炭化材（クリ：1年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

3. 結果

第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年代較正に用いた年代値を、第48図に暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代較正に用いた年代値は、今後暦年代較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であ

ることを示すものである。

なお、暦年校正の詳細は以下の通りである。

暦年校正

暦年校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年校正にはOxCal3.10(校正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1σ暦年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に2σ暦年年代範囲は95.4%信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。それぞれの暦年年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第6表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

遺物番号	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年年代に校正した年代範囲		暦年校正用年代 (yrBP±1σ)
				1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲	
1	PLD-7006	-28.03±0.15	-605±20	• 1956AD-1958AD		-606±19
2	PLD-7007	-26.70±0.23	4095±25	2840BC(12.4%)2810BC 2670BC(55.8%)2570BC	2860BC(19.9%)2810BC 2750BC(5.5%)2720BC 2700BC(68.7%)2570BC 2520BC(1.2%)2500BC	4093±25
3	PLD-7008	-29.85±0.17	415±20	1440AD(68.2%)1475AD	1430AD(91.1%) 1500AD 1600AD(4.3%) 1630AD	414±22
4 1	PLD 7009	-25.77±0.18	3780±25	2280BC(22.9%) 2250BC 2230BC(5.8%)2220BC 2210BC(13.6%)2190BC 2180BC(25.9%)2140BC	2290BC(85.4%)2130BC	3782±25
4 2	PLD 7010	-25.63±0.11	3720±25	2200BC(9.8%)2170BC 2150BC(15.0%)2120BC 2100BC(43.4%)2040BC	2200BC(17.8%)2160BC 2150BC(77.6%)2030BC	3719±24

*Q Hua and M Barbetti (2004) Review of Tropospheric Bomb ¹⁴C Data for Carbon Cycle Modeling and Age Calibration Purposes, Radiocarbon 46: 1273-1298. 測定日: 2007.2.24. ¹³C濃度: 107.84±0.26 ‰で計算

4. 考 察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。得られた暦年年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。なお試料の処理および測定に問題はみられなかったが、SI01・上として取り上げられた炭化材Na 1 (PLD-7006)は年代値が新しく、暦年校正を行うと、1956-1958calADという値が示されたことから、現代の値であった。またSI01・北壁として取り上げられた植物遺体Na 3 (PLD-7008)は、暦年校正年代の2σ(95.4%)の確率の高い範囲で、1430-1500calAD(91.1%)と、中世の年代範囲を示した。Na 1と3は住居跡北側の確認面付近から出土しており、確認面まで北側では表土下1m程であったため、後世のものが紛れ込んだ可

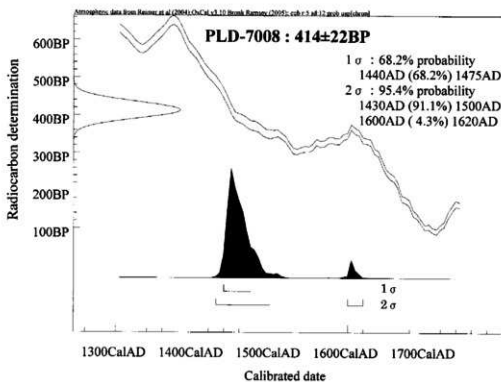
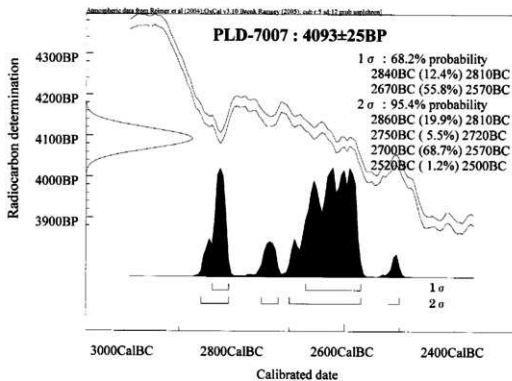
能性が高い。

その他の3点は、縄文時代に含まれる範囲であった。石組遺構から取り上げられた炭化材No 2 (PLD-7007) は ^{14}C 年代で $4095 \pm 25\text{yrBP}$ 、暦年較正年代の 2σ の高い範囲で $2700\text{--}2570\text{calBC}$ (68.7%)であった。群馬県内の測定例は少ないが、関東地方の土器付着炭化物の測定例と比較すると、縄文時代中期後葉、加曾利E 3～E 4式期の年代範囲に含まれると考えられる(今村編, 2004)。この炭化物と石組遺構が同じ時期ならば、石組遺構は敷石住居よりやや古い年代範囲を示していることになる。

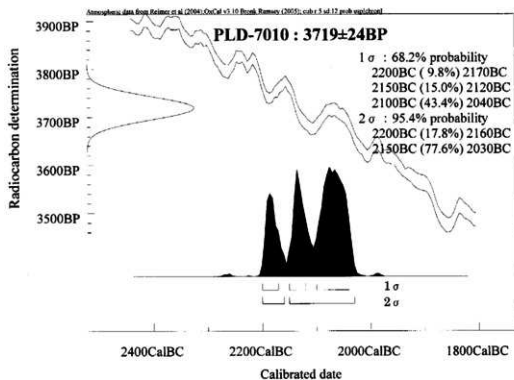
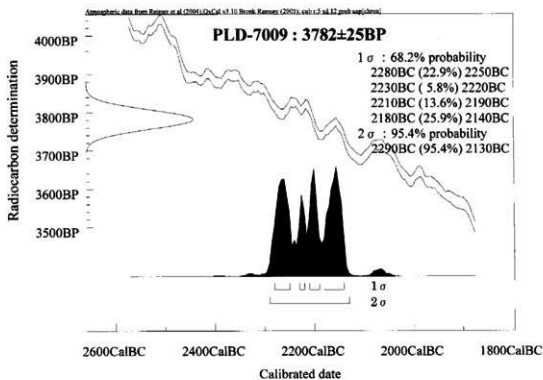
表土から出土した炭化材No 4-1 (PLD-7009) と4-2 (PLD-7010) は ^{14}C 年代で $3780 \pm 25\text{yrBP}$ と $3720 \pm 25\text{yrBP}$ 、暦年較正年代の 2σ の高い範囲で $2290\text{--}2130\text{calBC}$ (95.4%)と $2150\text{--}2030\text{calBC}$ (77.6%)であった。関東地方の土器付着炭化物の測定例と比較すると、縄文時代後期前葉、堀之内1式の年代範囲に含まれると考えられる(西本編, 2005)。

参考文献

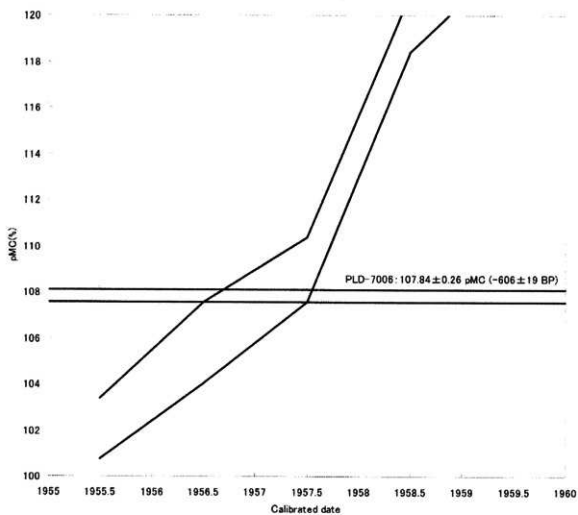
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
- 今村峯雄編. (2004) 縄文時代 □ 弥生時代の高精度編年体系の構築 平成13～15年度文部科学省研究費補助金基盤研究(A)(1) 研究成果報告書, 330p.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.
- 西本豊弘編. (2005) 弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—平成16年度研究成果報告, 228p.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第46図 年代測定図 1



第47图 年代测定图2



第48回 曆年較正結果

第3節 出土焼骨鑑定

林中原 I 遺跡IV出土焼骨

生物考古学研究所 橋崎 修一郎

1. はじめに

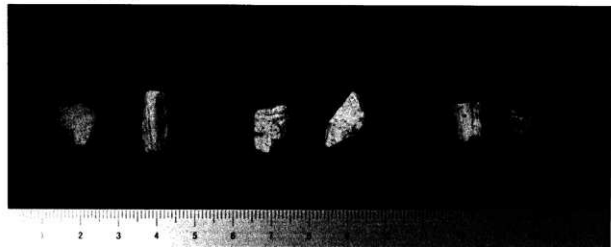
林中原 I 遺跡は、群馬県長野原町大字林字中原に所在する。長野原町教育委員会による発掘調査が、平成15(2003)年7月に行われた。この発掘調査により、縄文時代後期の敷石住居1軒・配石遺構2基・石組遺構1基が検出された。この敷石住居 SI01より、焼骨が出土したので、以下に報告する。

なお、焼骨と共に検出された炭化材5点は、AMS法による年代測定により、3点の校正年代は、 $3,719 \pm 24 \text{yrBP}$ ・ $3,782 \pm 25 \text{yrBP}$ ・ $4,093 \pm 25 \text{yrBP}$ という結果が得られ、縄文時代中期～同後期に比定されている。また、樹種同定では、不明1点を除く4点はすべてクリである。

2. 敷石住居 SI01出土焼骨

敷石住居 SI01出土焼骨は、表土・上・北壁と、3つに分けて出土している。どの資料も、白色を呈しており、約900度以上で焼成されたと推定される。資料が小さいため、そのまま焼成したのかあるいは白骨化させて焼成したのかは不明である。

- (1) 表土：主要な資料は、2点出土している。どちらも大きさ約1cm前後で、頭蓋骨片と四肢骨片であると推定される。しかしながら、資料が小さいため、人骨か獣骨かの同定は不可能であった。
- (2) 上：主要な資料は、2点出土している。どちらも大きさ約1cm前後で、四肢骨片であると推定される。しかしながら、資料が小さいため、人骨か獣骨かの同定は不可能であった。
- (3) 北壁：主要な資料は、2点出土している。どちらも大きさ約1cm前後で、四肢骨片であると推定される。しかしながら、資料が小さいため、人骨か獣骨かの同定は不可能であった。



第49図 SI01出土焼骨(左から2点ずつ、表土・上・北壁出土焼骨)

3. まとめ

林中原 I 遺跡の縄文時代敷石住居 SI01から、焼骨が出土した。しかしながら、資料が小さいため、人骨か獣骨かの同定は不可能であった。この遺跡周辺の長野原一本松遺跡からはニホンジカが（檜崎、2007）、横壁中村遺跡からは人骨・ニホンジカ・ニホンイノシシが（檜崎、2009abc）が検出されている。本遺跡においても、周辺遺跡と同様なのかどうかは、さらなる遺跡出土焼骨の分析を待つ必要があるだろう。

謝 辞

本遺跡出土焼骨を報告する機会を与えていただき、遺跡に関する情報をいただいた、長野原町教育委員会の富田孝彦氏に感謝いたします。

引用文献

- 檜崎修一郎 2007 長野原一本松遺跡 5 区 2 号配石出土獣骨、『長野原一本松遺跡(2)』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.309
- 檜崎修一郎 2009 a 横壁中村遺跡29区 6 号住居出土獣骨、『横壁中村遺跡(8)』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p. 221-224
- 檜崎修一郎 2009 b 横壁中村遺跡30区33号住居出土焼人骨、『横壁中村遺跡(9)』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p. 348
- 檜崎修一郎 2009 c 横壁中村遺跡(9)出土獣骨、『横壁中村遺跡(9)』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.349

第5章 ま と め

今回の調査は個人専用住宅の建設に先立つもので僅か60㎡の調査面積である。期間的な制限や開発深度の関係から調査区全域をローム層まで掘り下げて掘り方まで確認する調査ではなく、縄文時代後期前葉の敷石住居跡1軒、配石遺構2基、石組遺構1基だけの遺構検出に留まった。しかしながら調査区表土を含めた遺物出土量はテンバコ24箱（土器20箱・石器4箱）と顕著で、それは第3章で述べたように大部分が住居跡内に廃棄された遺物であり、いわゆる「土器捨て場」の様相を呈していたことに起因している。

遺構に関しては、敷石住居跡は周辺遺跡の調査成果から平面形は柄鏡形を呈すると考えられるが、主軸上に設置される炉跡が見られないことから主体部の約半分が検出されたにすぎず、柄部及び主体部の半分は調査区外に延びていると判断された。この想定が正しければ、住居規模は主体部で約7.0m×9.0mを測り、周辺遺跡の当該時期住居と比較しても大形の部類に入ることが指摘できよう。第3章でも触れたが、配石遺構は2基検出されているが、どちらも確認面からの深さが一般的な配石遺構の範疇を超えており、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いが、狭小な調査範囲なので可能性を指摘しておくに留めたい。また1号石組についても唯一の出土遺物である炭化材の放射性炭素年代測定の結果から中期後半に帰属することが判明した。調査時のサブトレでは床面や柱穴等の住居跡と判断する材料が揃わなかったことから石組遺構として処理した経緯があるが、板状石の組み方からも判断して中期後半の竪穴式住居の炉跡であった可能性が高く、調査区全体が住居範囲であったであろうと推測される。今回図化できなかったが、調査区表土出土遺物には加曾利E式土器が相当量出土していたこともこの見解を肯定するものであろう。

遺物に関しては後述するとして、調査の成果と課題として以下の3項目について述べてまとめたい。

第1節 遺物の廃棄について

本調査区のSI01の覆土上層に大量の遺物が廃棄された状況で検出された。出土量の多寡はあるにせよ、炉体土器や埋設土器などを除けば、そもそも発掘調査により住居跡から出土する遺物のほとんどが廃棄されたものであることを忘れてはならないだろう。住居内への遺物の廃棄行為に関してはこれまで数多くの研究がなされ、集落論へと展開されている。廃棄行為に一定のパターンがあると解釈し、さらに発掘調査によって現れる現象と廃棄行為を結び付けて6つのパターンを設定し、個々のパターンにその廃棄の背景の動機づけをしていった小林達雄氏の一連の研究があり（小林1965・1974）、そのパターン論の是非を議論・検証するかたちで集落論が展開されてきている。ここでは個々の研究を取り上げるつもりはないが、廃棄行為の背景の解釈などの前提として、個々の遺構に立ち返り、多種多様な廃棄のあり方を認識すること、発掘調査で現れる現象を丁寧に検討することが先決であることが指摘されている（宇佐美2004）。このことを念頭に置き、本調査区の事例を見ていくことにする。

①廃棄が行われたSI01は部分検出で、主体部と柄部からなる柄鏡形敷石住居の主体部の西側約半分が検出された想定している。住居北側と南東側で掘り込み面を確認することができたが、西壁につい

ては調査時に明確に捉えることができなかった。また北西部で1号石組と重複し、これを切っているが、この1号石組は、出土炭化材の年代測定により、中期後半の竪穴式住居の炉跡である可能性が高いことが判明した。もともと調査区全体が中期後半の竪穴式住居の範囲内でその後に、それを切るかたちでSI01が構築されたと考えられる。

②遺物は表土掘削後に出土し始めた。調査時には覆土の中に土器・石器があるというよりは土器・石器の中に覆土があるという状況であった。ある程度ブロックを掘り下げて写真等の記録を採った後に同一個体と思われるかたまりをドットで取り上げながら掘り下げていった。その際に遺物群を包含している覆土には炭化材(粒)とともに骨片が多く混入しており遺存の良好な焼骨はサンプリングした。覆土中の焼土は顕著ではなく2ヵ所を把握できただけである。うち1ヵ所は下層の床面近くで確認された。1遺物のブロックは住居覆土の上半分でなくなり、その下の層では破片の出土は見られたものの顕著なブロックでの出土は確認されていない。最後に床面検出時に遺物の出土が見られたが、破片という認識で一括で取り上げたためドットで示していない。第7図の遺物出土状況ドット図を見ると、遺物ブロックはレンズ状に堆積しており、このブロックを包含していたのが第6図第1層、その下の遺物が希薄だったのか同図第3層にそれぞれ対応することが分かる。また住居覆土は南東隅の攪乱を除き自然堆積を示していると考えられ、人為的な埋め戻しの状況は把握されていない。このように住居廃絶時期に近い段階で廃棄された遺物が床面直上で出土し、その後、一次堆積土である第6図第3層は北壁付近の同図第5層・4層の堆積後に形成されていることからある中断時間をもって一括廃棄が為されたことが推測される。このことは各々の土器の様相からも相対的に窺われるが、接合関係をみると床直遺物と上層ドット遺物が接合あるいは同一個体である例も見られ、それほど単純でもなさそうである。

③廃棄遺物の平面的な広がりは第7図で確認されるように、住居中央部から西側に帯状に広がっている。住居中央部で把握された焼土を中心としたブロックとP4・P5を中心としたブロックに分けることも可能であろう。住居の北側及び南側では破片での出土は認められたがブロックとしては分布せず、全体的に希薄であった。第7表の層別別の遺物数量一覧をみると住居出土土器総量77,242gのうち一次廃棄と考えられる床面直上と下層出土土器が26,517g(34.4%)、二次廃棄と考えられるドット・上層・一括土器が50,725g(65.6%)であった。重量的にも全体の7割弱が二次廃棄によるものである。なお下層・床面直上はブロック状には出土が認められなかったためドットで上げていなかったのは全体の廃棄状況を把握する上では不十分であったことは否めない。

第7表 SI01出土遺物層別別数量一覧

	土 器		石 器		割 片	
	点 数	重 量 (%)	点 数	重 量 (%)	点 数	重 量 (%)
床面直上	234	6,378g (8.3)	9	813g (3.5)	19	431g (18.0)
下 層	1,000	20,139g (26.1)	29	3,925g (17.0)	12	644g (26.9)
小 計	1,234	26,517g (34.4)	38	4,738g (20.5)	31	1,075g (44.9)
ド ッ ト	297	31,907g (41.3)	18	14,417g (62.5)	7	806g (33.6)
上 層	1,014	18,497g (23.9)	13	3,091g (13.4)	41	435g (18.1)
一 括	22	321g (0.4)	3	836g (3.6)	3	81g (3.4)
小 計	1,335	50,725g (65.6)	34	18,344g (79.5)	51	1,322g (55.1)
総 計	2,569	77,242g (100)	72	23,082g (100)	82	2,397g (100)

④廃棄遺物の内容であるが、半完形遺物が多いことが特徴的である。前述したように床面直上で出土した土器群と上層一括廃棄された土器群は分別することが可能で、若干の時間的隔たりを有している。時期は前者が堀之内1式期新段階を主体とし、後者が堀之内2式期中段階が主体で、加曾利B1式期はごく僅かである。石器に関しては、完形の石皿(第34図231)が磨石(同図232)とセットで伏された状態で出土している以外は疎らな出土であった。土偶や石棒等の希少性や象徴性を帯びた特殊な道具は出土していないが、後述する釣手付き注口土器が一括廃棄遺物であることは注目される。

⑤最後に本遺構の集落内での位置に関しては、周辺地点の調査結果から、集落の西端であることが指摘できよう。第3図で調査地点の一覧を示した。本遺跡は押手沢に開析された扇状地形上に立地しており、その流路が幾たびも移り変わって遺跡内には南走する埋没河道が数条確認されている。これまでの調査で本遺跡の南側には前期集落・中近世城郭と集落が存在し、北側には縄文時代中期後半～後期前葉集落が存在することが分かってきた。本調査地点周辺で後期前葉の住居跡は同図7・9・12・15地点で検出されており、すぐ北西で調査された同図15地点では遺物を一括廃棄された当該期住居が部分的に調査された他、中期後半の住居内にも一括廃棄された状況が確認されている。これより西側では同図14地点の中央付近で中期後半住居が2軒重複して出土しているだけで、調査区西側はローム層が西傾しはじめ、同図1地点では泥炭層(シルト層)が確認されている。

第2節 釣手付き注口土器の復原について

廃棄された遺物の中で一際目を引く土器が発見された。釣手の付いた注口土器である。発掘調査の時間的制約もあり、調査段階で認識していたのが注口部の部分である。その後の整理調査段階で注口部に釣手部が接合し、その他に胎土や器面調整から同一個体を抽出し、大きく3箇所部位が出土していることが判明した。以下それぞれについて観察していくことにする。

1. 資料の観察

a. 注入口部(第20図40-1)

一般的な注口土器の口縁部に該当する部位である。形態の系統発生的な対応からみると、違和感を感じるかもしれないが、今回復原するにあたり「注入口部」と呼称して注口部と区別したい。口唇部上面が平坦であることや頸部に巻かれた隆帯がほぼ水平であることから、注入口部がほぼ直立すると考えた。また上面から見ると体部最大径ラインは楕円形を指向しており、本部位が長軸方向の片端を担うことが理解される。器形は口縁部・頸部・体部から成る壺形を呈する。口縁部は注水軸方向がその直交方向に比べて外反して大きく開いている。口縁部内面も注水軸方向を意識してか、内面を肥厚させて内側に三角状にせり出すようである。その肥厚部外面には側線付隆帯を垂下させ、頸部に巻かれた断面三角状の同隆帯の蕨手状モチーフを介して繋がっている。また体上部にも端部に逆巻きの蕨手状モチーフ(横位S字状文)をもつ同隆帯により横位方向に施文が展開している。モチーフ以外の隆帯上にはLR縄文が施されている。残存高11.1cm、復原口径6.2cmを測る。外面調整は口縁部～体上部が丁寧な横位ミガキ、以下丁寧な縦位～斜位ミガキで光沢がある。内面調整は横位ナデだが頸部～体上部は指頭圧痕が残される。焼成は良好で胎土には角閃石・石英が混和材として観察される。色調は外面が黒褐(7.5YR/3/2)、内面が灰褐(7.5YR/4/1)を呈している。なお、外面には黒斑が認められる。

b. 注口部及び釣手 (第20図40-2)

注口部は瓢箪形を呈している。注口縁の根元及び注口部と体部の境には断面三角状の隆帯を巡らし、隆帯上にLR縄文を施している。その間には同隆帯を十字状に貼り付けて4箇所を枠状区画を削り出して区画内には隆帯に沿って沈線を描いている。また注水軸側の注口部と体部の境には蕨手状モチーフを付している。注口部と釣手は環状突起を介して連繫されている。突起の上位で釣手の根元には凸状表現がなされている。外面調整は丁寧な横位ミガキで光沢がある。内面調整はナデで注口縁部はソケット状に埋め込まれたまま無調整である。釣手は断面楕円形でアーチ状を呈する。残存高は注口部が6.0cm、釣手部まで含めると10.4cm、復原注口径は2.1cm、把手断面は長軸2.1cm、短軸1.8cmを測る。焼成は良好で胎土には角閃石が混和材として観察される。色調は外面が暗赤褐(5YR/3/2)、内面が灰黄褐(10YR/4/2)を呈している。

c. 底部 (第20図40-3)

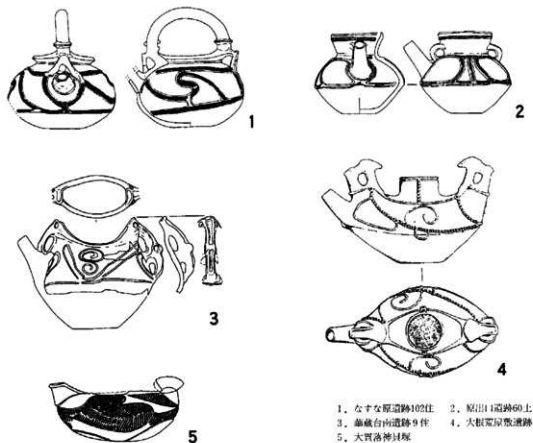
底面が楕円形を呈する底部である。外傾して立ち上がり、体下部は丸く膨らんでいる。残存高3.6cm、短軸方向の復原底径9.4cmを測る。外面調整は丁寧な斜位～横位ミガキで光沢がある。内面調整は横位ナデで底面に網代庄痕(2超1潜1送)を残している。焼成は良好で胎土には角閃石・石英が混和材として観察される。色調は外面が暗赤褐(5YR/3/2)、内面が黒褐(10YR/2/2)を呈している。

2. 資料の復原

上記3箇所の部位から予想される形態は底面・体部が楕円形を呈し、注入口部と注口部がアーチ状の釣手で連繫されるというものであった。このような形態は管見の報告書や集成等をあたっても合致するものは見られなかったが、この土器を復原する上で参考になる類例を第49図に示した。第49図1は東京都町田市なすな原遺跡(なすな原遺跡調査会1984)第102号住居址出土例で、本例と同様に釣手状把手をもち、体部文様の描出法にも共通性をもっている。この土器は同住居址北東部の柱穴の間から隣接して他に2個体の釣手付き注口土器とともに出土している。当該期の釣手付き注口土器の類例が少ない中、同一住居で3個体出土していることは特異であろう。これらに共通することは一般的に橋状把手の上位に渦巻状突起などが付される頂部から釣手が伸びているということ、その連繫部は対面してシメトリリーとなっていることに注目されたい¹⁾。また本例と同様に連繫部に凸状表現が認められ、突起表現との対応性が窺われる。同図2は神奈川県横浜市原出口遺跡(横浜市ふるさと歴史財団1995)60号土壌出土例で体部文様の描出法の他に、橋状把手が口縁部の下に付けられて口縁部・頸部・体部からなる壺形を呈する点は本例の他、本遺跡出土の第19図32・33との系統性が注目される。同図3は神奈川県横浜市華蔵台南遺跡(横浜市ふるさと歴史財団1993)9号住居址出土例、同図4は群馬県新田郡新田町(現太田市)大根荒屋敷前遺跡出土例である。前者は口縁部、後者は体部が舟形状楕円形を呈している例で、両者とも楕円形の長軸方向に縦位把手が対面し、注口部もその軸に沿って付設されている。これに加えて第19図35は底面が楕円形を呈しており、体部は隅丸長方形を呈すると推測されるがこの場合もやはり長軸方向に注口部がつけられていることが確認される。第49図6は茨城県大洗町大貫落神貝塚(藤本1980)出土例でやや後出ではあるが体部が舟形状楕円形を呈しており、口縁部が注水軸に沿って注口部の対面に転移する現象が確認できる。

このように、当該期注口土器は楕円形を呈す場合は長軸方向に縦位の橋状把手あるいは釣手が付設され、この間に口縁部をもつ形態を採ってこれを注水軸として注口部が付設されるのが普通である²⁾。しか

しながら本例の場合は注水軸に釣手が付けられる関係で口縁部がその軸に沿った注口部の対面に偏って付けられている。言い換えれば、釣手を避けて注水軸の対面に口縁部を移動させたということであろう。以上の事項を念頭に復原したのが第20図40-1+2+3である。注水軸側でみると注入口部は下脹れの壺形、注口部は瓢箪形を呈する。復原法量は器高が釣手部20.8cm、注入口部17.4cm、注口部16.5cm、口径が注入口径6.2cm、注口径2.1cm、底径が長軸15.6cm、短軸9.4cm、体部最大長27.6cm、体部最大幅15.6cmを測る。



1. なすな原遺跡102住 2. 原出1遺跡60土
3. 華藏台南遺跡9住 4. 大根荒原遺跡跡
5. 大賀落神貝塚

第50図 関連資料

第3節 本遺跡出土の堀之内式土器について

今回の調査でSI01に廃棄されていた大量の遺物群は堀之内1式新段階～加曾利B1式までの時期である。廃棄状況の層位的な見解から床面直上あるいは下層出土の土器群と上層出土の土器群という2段階の廃棄が想定された。前者は堀之内1式新段階を主体とし、一部堀之内2式古段階まで、後者は堀之内2式中段階を主体とし、一部加曾利B1式までの時期に概ね比定される。特に後者はブロックでの分布状況、レンズ状堆積として捉えられ一括廃棄の様相を呈していた(第7～13頁)。

1. 器種構成

主体となるのは深鉢・鉢でこれに注口土器(壺形含む)や少量の浅鉢(椀状も含む)が加わる。全体的に頭部が括れて体部が膨脹する器形が深鉢の大部分を占める。第8表にSI01出土土器の部位・層位別

数量一覧を示した。この中で体部縄文は懸垂文間の充墳縄文や沈線区画の磨消縄文を含んでおり、体部沈線（隆線）は縄文施文のないものである。両者を比較すると、一次廃棄と考えられる床面直上・下層では後者が59.8%と優位なのに対して、二次廃棄と考えられるドット・上層・一括では前者が64.7%と優位なのが傾向として捉えられよう。また深鉢や鉢は有文のものが多いが、無文の粗製深鉢も組成に占める割合は高く、単純に体部の破片数では全体の約3分の2に昇る⁹⁾。粗製深鉢と一括りにしているものの中には削り込んで器壁を薄くした丁寧な作りのもの（第23図46）や帯縄文を施したもの（第21図41）も見られ様ではない。

第8表 SI01出土土器部位・層別数量一覧

	体部 縄文		体部沈線(隆線)		体部 無文		11 雑器		底 部		上 製 品	
	点数	重量 (%)	点数	重量 (%)	点数	重量 (%)	点数	重量 (%)	点数	重量 (%)	点数	重量 (%)
床面直上	42	480g (5.7)	44	703g (15.2)	130	1,760g (6.2)	17	3,190g (11.4)	10	229g (3.1)	1	8g (7.8)
F 層	137	2,498g (29.6)	149	2,664g (34.6)	580	10,657g (35.2)	109	3,492g (12.4)	52	1,988g (26.7)	3	40g (39.2)
小 計	179	2,978g (35.3)	163	2,767g (59.8)	700	11,817g (41.4)	126	6,680g (23.8)	62	2,217g (29.8)	4	48g (47.0)
F 上 層	27	3,450g (41.0)	40	365g (7.9)	154	7,554g (26.5)	42	17,048g (60.7)	64	3,481g (46.8)	0	0g (0)
上 層	136	1,956g (23.2)	90	1,454g (31.4)	606	8,964g (31.4)	120	4,333g (15.4)	59	1,736g (23.4)	3	54g (23.4)
一 括	3	41g (0.5)	4	46g (0.9)	13	294g (0.7)	2	30g (0.1)	0	0g (0)	0	0g (0)
小 計	166	3,436g (64.7)	104	1,865g (40.2)	723	16,722g (58.6)	164	21,411g (76.2)	123	5,217g (70.2)	3	54g (53.0)
総 計	345	8,434g (100)	267	4,632g (100)	1,473	26,539g (100)	299	28,101g (100)	185	7,434g (100)	7	102g (100)

2. 分類

ここでは本遺跡出土の堀之内式土器のうち有文の深鉢および鉢を形態と文様構成で大別し、特徴を抽出したい。

第1群：外反する口縁（頸）部は無文で頸部で括れて体部が影響する器形を呈するもの。文様施文域は体部全体に及ぶ。無文の口縁部から頸部にかけては垂下隆線が貼付されるものが多い。これらは文様構成で以下に細分される。

- a類：横位の連結文構成をとるもの（第15図3・第17図24・第28図118・119）。
- b類：懸垂文構成をとるもの（第14図1・2・第15図6）。

第2群：器形等は第1群と同じ特徴をもつが、施文域が外反する口頸部から体上部となり、体下半が無文となるもの。有刻の横位隆線や文様構成など次の第3群と類縁性が高い（第17図17～23・第29図146・162・163）。

第3群：いわゆる「朝顔形」を呈するもの。

- a類：帯縄文による幾何学文構成のもの（第16図11・12・16・第41図46など）。
- b類：帯縄文と枠状文などで文様を構成するもの（第16図10・13～15）。

第1群はその特徴から広義の“小仙塚類型”（鈴木1999、2000a）であろう。第1群a類は横位連結文構成の系列である。a類は綿田弘実氏がA1群とした（綿田2002）主文様脇の区画文内に充墳縄文され、文様下端を弧状に閉じたもの（第28図118・119）とA2群としたJ字状渦巻文とそれを連結する斜行文構成のもの（第17図24）にさらに細分される。前者は周辺遺跡では出土しているが⁹⁾、本調査区では断片的で可能性のあるものを提示しておく。器壁が厚く、文様描線も幅広く特に古い段階では沈線の集合化は顕著ではないことが特徴的である。後者は復原されたのは1個体のみで体部の縮小や口頸部の発達し

た器形や文様の痕跡化から堀之内2式に下るものである。破片資料では第27図109がJ字状渦巻文であろう。また第15図3は体部下半を欠くが結束状幅広沈線による三角文構成で本類の中で考えておきたい⁶⁾。b類は3条単位を基本とした結束状沈線で懸垂文構成を採る系列である。結束状沈線のみのも(第14図1・2)と間隙に充填縄文を施すもの(第15図6)に細分される。前者は復原されたのが2個体のみでいずれも深鉢の器形を呈し、一次廃棄と考えられる床面直上出土の土器である。この縄文が文様要素に加わらない状況は石井寛氏のA～C群(石井1993)に見られるように南関東西部地域の特徴と符合している。後者は部分復原された1個体のみで文様の主要部分を欠いているが頸部の貼付文を基点として2～3条単位沈線による垂下文構成で、間隙に縄文を充填しているようである。本類に属すると考えられる破片資料をみると両者が一定量確認される。ただし後者は縄文地文のもの(第28図122など)も認められる。

第2群は第1群の“小仙塚類型”と第3群の朝顔形深鉢との緊密な関係をもちながら形成された地域的な土器群と考えられ、一括廃棄土器群の主体をなす土器群である。文様は横位連結文系列で構成され、括れ部を施文域とするためか基本的な文様構成は上下に横帯を配し、その間に主文様を連結していくという事で統合されている。言い換えれば器形により施文域が規定されているということだろう。その中で主文様がJ字状渦巻文とそれを連結する斜行文構成のものや三角文・菱形文などのものに細分される。前者は第17図17のみで丸く膨脹した体部から直立気味に開く口頸部が特徴的な器形で、同図23の鉢の頸部が伸長したような器形を呈している。文様は2条単位の沈線で上下区画した間に渦巻文とそれを連結する斜行文で構成されており、空白部は充填縄文を施している。主文様を白抜きにする綿田氏のA2群の流れを汲むものと理解できよう。後者は最も安定している土器群で、破片資料を見ても後者に関わるものが多い。部位の対応や文様など次の第3群との親密性が高いことが指摘できよう。例えば第16図11と第17図20は器形は異なるが菱形文+楕円文という同じ構成の文様を用いるなど転写現象が確認される。これらの中では明瞭な差異を見出し難いが、第17図21のように有刺隆線や8字状貼付文が細密化・簡略化して三角文が単位文となるものは本群の中では新しい要素といえるだろう。

なお本群と関連して、懸垂文構成をとる系列は破片資料で断片的に垣間見れる状況で今回は分類の対象としなかったが、これらは堀之内1式期から系列を迎えることができることで本群とは系統が異なるものと考えられる。第28図135や第26図88など綿田氏のB群・品田氏のCII群(品田2002)と考えられる類である。これらは“体部屈曲鉢”(鈴木2002)として概念化される土器群で、堀之内2式期には文様構成など本群と相互に影響あっている状況が窺えるが、体下部との境界に稜をもち、その文様は深鉢系の文様が多く認められるとともに、口縁部の裝飾性にやや欠ける傾向をもっていることに注意が必要である⁶⁾。将来的には別群で捉えるべきものと考えられる。第27図112～114は同一個体であるが3本単位沈線による垂下文・蛇行文を交互に繰り返す構成で、南三十稲葉式土器との緊密な関係が窺えよう。

第3類はいわゆる朝顔形深鉢である。標準的な朝顔形を呈するものは少ない印象を受ける。第16図12は体部がやや膨脹気味であったり、同図11や14は口径に比して底径が大きいなど地域の変容を経たものと考えることができよう。帯縄文を重畳して幾何学文を構成し、施文域を体中部あたりまでもつものをa類、帯縄文や棒状文など施文域が体上部に収縮されているものをb類とした。a類では第16図12は口縁端部に横位沈線を残して体部に不安定な幾何学文を構成し、第16図16は2段の菱形文、第41図46も帯縄文を重畳させるなど縦位方向への施文意識は古い要素といえよう。b類では第16図14などのように突起が付設され、それと呼応して内面文様も発達するものや同図9のように縄文帯自体が文様となってい

るのは新しい要素である。

3. 特徴と課題

有文深鉢・鉢の内容を理解するために該当遺物が少ない中、3大別をしてみた。その結果、称名寺式終末期の「茂沢類型」（鈴木1999）の系統を引く「小仙塚類型」が堀之内1式期新段階から精製土器の主要な部分を占めているが、堀之内2式期には「第2群」、言い換えると体下部が影響する形態をもつ深鉢が主体的であり、いわゆる朝顔形深鉢は客体的である状況が窺われた。このことは本地域に堀之内1式期における「堀之内類型」（鈴木1990）の稀少性と関連するものと考えられる。

一次廃棄と考えられる堀之内1式期新段階では第1群b類が主体であり、充填縄文を施す第1群a類も伴っていることが確認された。また第1群a類とした第15図3の結束状幅広沈線の三角文構成もこの時期に伴うと思われるが、同図6は頸部に2条の有刻隆線を巡らしており、堀之内2式古段階まで下る可能性がある。同図7はその器形と体部に刺突状痕跡が残っていることから判断して三十稲葉式系であろうか。また同図8は体部に垂下隆線下のボタン状貼付文を基点として放射状に三角区画文を作り出す文様構成や内屈する口縁部の列点状刺突文などは堀之内1式の中で理解できるがその系譜も含めて不明であり類例を待ちたい。

二次廃棄と考えられる堀之内2式中段階では第2群が主体であり、それに第1群a類や第3群が伴っている。第2群はそれまでの器形を維持しつつも、体上部に施文域を転移し、第3群とした朝顔形深鉢の文様転写がされている現象が確認されるなど、相互に交渉しあっている状況が読み取れる。また器形や器壁を薄く仕上げる掻き取り手法を多用する第3群は、第2群はもとより粗製深鉢や注口土器などの他器種にまでその影響を与えている状況が看取される。この第3群はa類とb類に分けたが、その特徴から時間的推移が窺え、a類が堀之内2式期中段階、b類が新段階に比定されよう。また共伴する第2群は文様の転写などからほとんどが前者に含まれると考えられる。

粗製土器は11個体を図示したが、底部から外反して開くもの（第21図41）、底部から緩やかに内彎して立ち上がり口縁部は直線的あるいはやや外反しながら開くもの（第21図42・第22図43・45・第24図48・49）、底部から外反しながら丸く立ち上がり口縁部は外反しながら開くもの（第23図46・47）、体部に屈曲をもつもの（第24図50・51）など器形にバラエティーがあることも精製土器の複雑さを反映しているものと考えられる。土器組成の半分以上を占めるほど粗製深鉢が増えている傾向は他地域との同調を示しているといえるだろう。

注口土器においては第19図32・33のような「福田類型」（秋田1999）に連なる系統が安定していることも本地域の特徴の一つである。33は口頸部にかけてやや内傾しながら立ち上がり体部との分離が不明瞭であるのに対して、32は口縁が直立し外反して開いている。これら口縁部と長楕円形区画刺突列文帯の系統的な発達の過程が垣間見られることが注目される¹⁷⁾。その他に球状の体部から短く立ち上がる口縁をもつ無頸のもの（同図34）や「石神文様」（秋田1996など）を底部外面にもち体部が隅丸長方形を呈すると考えられるもの（同図35）、そして釣手付き注口土器（第20図40）などがあり、系統関係も含めて検討が必要であろう。

以上のように本遺跡出土の堀之内土器は、堀之内1式期から千曲川流域との共通性が多く、第2群に象徴的な独特の堀之内2式土器群で構成されていることが大きな特徴といえるだろう。吾妻川流域では、クヌギII遺跡で堀之内1式期の敷石住居跡の発掘調査を嚆矢として、近年ダム関連の調査が増え、

長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、石川原遺跡、そして本遺跡が後期前葉の主要集落として把握されてきている。資料も増加しつつあるが、そのほとんどが未報告である。本来ならば現段階で報告されている資料の集成・分類をした上で出土土器群の客観的評価をするべきであったが、時間的・紙幅の都合上、成し得なかった。今後は上記の吾妻川流域の遺跡群の資料とともに総合的に本流域における当該期土器群の様相を捉えていくことが必要であろう。

本遺跡出土の堀之内土器に関して資料観察を通して鈴木徳雄氏より多くの御教示をいただいた。末筆ながら感謝申し上げたい。筆者の力不足で消化しきれなかった部分が大いにあり、今後の課題としたい。

註

- (1) 多くの注I土器に付設されている縦位橋状把手は有機質を用いて使用したと想定され、群馬県勢多郡新里村(現桐生市)大原H遺跡出土例には把手についた紐によって擦れた痕跡が確認されている(小菅1999)。釣手はその有機質のものを土製で表現したものと考えることができ、懸垂時の安定性を考慮すれば、橋状突起は対面する水平な位置に付設するのが合理的であろう。
- (2) この注口土器における注口部と把手の位置関係については研究当初の中谷治平二郎氏が触れていること(中谷1927)や山内清男氏が口縁部が楕円形を呈するものの存在やその注水軸を意識していた(山内1940)ことなどは鈴木徳雄氏によって整理されている(鈴木1992)。
- (3) 胴下半の破片を含んでおり、正確な数字ではないが、無文土器片の相対的な数量的優位性は変わらないであろう。また長野県高井郡高山村湯倉洞窟(綿田2001)においても、本例と似たような分析結果が出ている。
- (4) 綿田氏のA1群の中でも古相を示す長野県小県郡東部町(現東御市)和中原遺跡(綿田1985)出土例とよく似た鉢が長野原一本松遺跡5区79A号土坑(諸田2001)で出土していることや北関東地域の特に関東地域の器形的特徴にも触れ、「長野県地域と比較すると、深鉢形が多く、鉢形が少ない傾向がある」ことは鈴木徳雄氏によりすでに指摘されている(鈴木2002)。本地域では横壁中村遺跡(藤巻2009など)でもこれらに連なる土器群が認められている。
- (5) 石井氏は原出口遺跡20号住居址出土の2つの「横位施文域」をもつ土器に着目し、これらは東北地方北部に分布する「I型内系土器」の関与を指摘し、「この一群に見られる三角形の連なりは、横位に展開する渦巻文に派生するもの」とした(石井1995)。また鈴木氏は長野原一本松遺跡(諸田2001)5区326号土坑出土深鉢の2段の三角区画文の文様に関して、綿田氏がB1群とした口縁部に無文帯を設けずに体上部の渦巻文から集合沈線により放射状に三角区画文を施す類から派生する可能性を指摘されている(鈴木2002)。このような中で本分類で第1群A類とした第15図3の三角文構成も成立し、堀之内2式の「磨消縄文」(山内1940)以前の特徴として把握したい。
- (6) 鈴木徳雄氏の御教示による。
- (7) 本遺跡の隣接地で口縁部の分立した例が出土している(長野県町教育委員会2009)。県内では勢多郡赤城村(現渋川市)三原田遺跡出土例(赤山1988)が口縁部の分立した「福田類型」注口土器として知られている。これら「福田類型」注口土器の吾妻川流域における安定的出土を見ると、この注I土器の供給地の一つであり、交易品(藤巻2009)の性格が想起される。

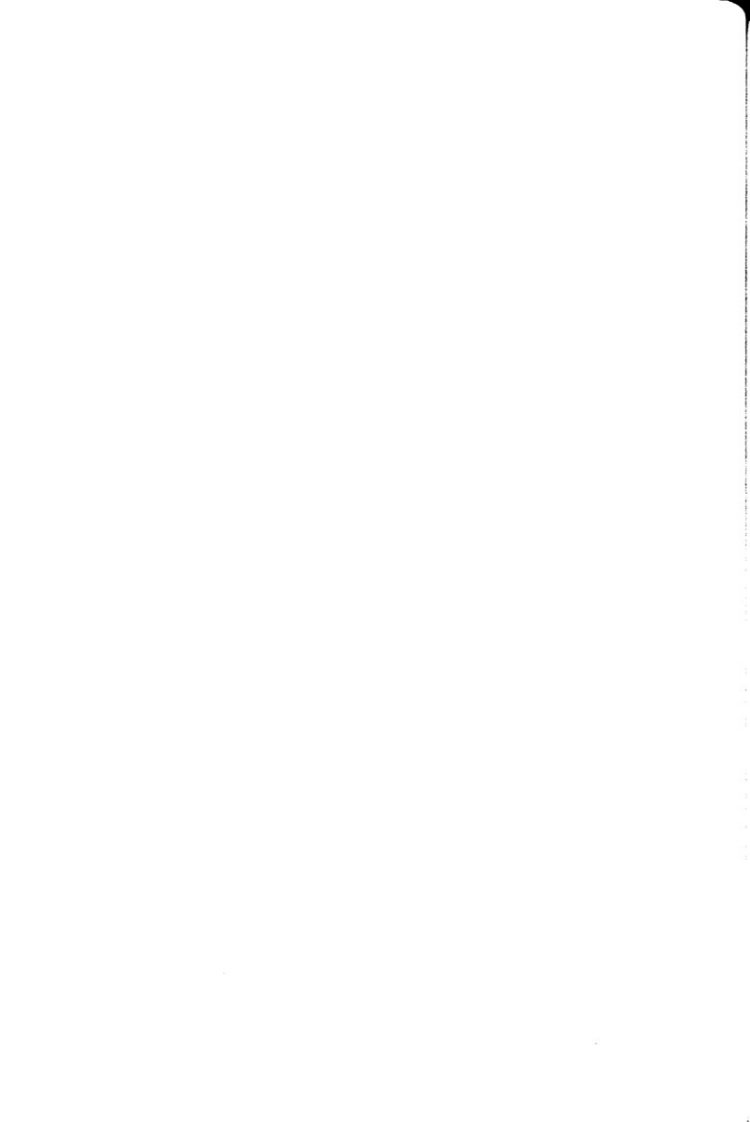
引用・参考文献

- 赤山容造 1988「三原田遺跡」『群馬県史 資料編1、原始・古代1』群馬県史編さん委員会
- 秋田かんな 1994「加曾利B1式注口土器の成立(千葉)―王子/台遺跡出土の注口土器から―」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4
- 1996「南関東西部の加曾利B式土器―構造の理解に向けて―」『第9回縄文セミナー―後期中葉の諸様相―』『同記録集』
- 1996「石神型」覚え書き」『東海大学校地内遺跡調査団報告』7
- 1999「注口土器の系統変化」『季刊考古学』69号
- 2008a「加曾利B式土器」『総覧 縄文土器』
- 2008b「注口土器と注口付土器―器種間の関係性と「器種文様」からみたシステム―」『縄文時代の考古学7 土器を読み取る 縄文土器の情報』同成社

- 阿部芳郎 1999 『村東山手遺跡出土の堀之内2式土器の型式学的検討』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8—長野市内その6—村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 池谷信之 1990 『編取・堀之内型注口土器』『縄文時代』第1号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 1984 『堀之内2式土器の研究(予察)』『調査研究集録』第5冊
- 1993 『堀之内1式期土器群に関する問題』『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
- 1995 『原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって』『川和内原遺跡・原出口遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
- 上野佳也・西田泰民他 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡 総集編』軽井沢町教育委員会
- 宇佐美哲也 2004 『竪穴住居出土遺物の一般的なあり方』『多摩のあゆみ116号』
- 関岡俊明 2008 『土器の廃棄』『総覧 縄文土器』
- 加納 実 2002 『南関東における堀之内式の様相』『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』・『同記録集』
- 2008 『堀之内式土器』『総覧 縄文土器』
- 小菅得夫 1999 『第25回企画展 群馬の注口土器』勢野野岩窟文化資料館
- 小林達雄 1965 『遺物埋没状態及びそれに派生する問題(土器廃棄処分の問題)』『米島貝塚』庄和町教育委員会
- 1974 『縄文世界における土器の廃棄について』『国史学』93号
- 品田高志 2002 『新潟県における縄文後期前葉期の土器群—柏崎市十三本塚北遺跡を中心に—』『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』・『同記録集』
- 鈴木克彦 1983 『注口土器の集成研究』雄山閣
- 鈴木徳雄 1983 『関東南東部』『シンポジウム堀之内式土器』市立市川考古博物館
- 1992 『編取後期注口土器の成立』『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会
- 1999 『称名寺式関沢類型の後裔—堀之内1式期における小仙塚類型群の形成—』『縄文土器論集—縄文セミナー—10周年記念論文集—』
- 2000a 『称名寺式土器』・『堀之内式土器』『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 2000b 『称名寺式終末期と裝飾帯の変化—所謂「I」文様帯』の形成と堀之内1式—』『群馬考古学手帳』第10号 群馬土器観会
- 2002 『北関東における堀之内式の様相』『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』・『同記録集』
- 丹野雅人 1985 『注口土器 小考—縄文時代中期終末期における様相—』『東京都埋蔵文化財センター—研究紀要』3
- 2008 『土器片加工内板・鏝』『総覧 縄文土器』
- 谷藤保彦 1990 『群馬県—後期前葉の土器群』『第4回縄文セミナー—縄文後期の諸問題』・『同記録集』
- 中島庄一 2008 『称名寺式土器』『総覧 縄文土器』
- 中島庄一他 1994 『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—長野県中野市内—栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 長野原町教育委員会 2009 『林中原1遺跡Ⅱ』『印内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
- なすな原遺跡調査会 1984 『なすな原遺跡№1地区調査』
- 西田泰民 1989 『堀之内・加曾利B式土器様式』『縄文土器大観』4
- 1992 『縄文土器』『古代学研究所研究紀要』2
- 花岡弘・綿田弘実他 1994 『石神遺跡群 石神』小諸市教育委員会
- 藤本弥城 1980 『大貫落神貝塚』『那珂川下流の石器時代研究II』
- 藤巻幸男 2009 『後期土器の時期区分と概要』『横壁中村遺跡(8)—縄文時代後期住居編1—』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省
- 諸田康成 2001 『まとめ』『長野原—本松遺跡(1)—』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省
- 山内清男 1940 『堀之内式』『日本先史土器図譜』第VI輯
- 横浜市ふるさと歴史財団 1993 『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告14
- 1995 『川和内原遺跡・原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19
- 綿田弘実 1985 『小原郡東部町和中原遺跡出土の後期縄文土器』『上小考古』№18 上小考古学研究会
- 1990 『長野県の縄文後期前葉の土器群』『第4回縄文セミナー—縄文後期の諸問題』・『同記録集』
- 1997 『縄文土器について』『滝沢遺跡』御代田町教育委員会
- 2001 『縄文土器 中期末葉から後期』『湯倉洞窟』高山村教育委員会
- 2002 『長野県の縄文後期前葉の土器群II』『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』・『同記録集』

19-32	8	EL1	(10.29)/(11.30)/-	良好	内回り・窓付	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層
19-33	8	EL3	(17.80)/(11.30)/-	良好	角店付	近所/大規模	1棟第一体中部の残存。	上層(ドット)
19-34	8	RE1	(10.11)/(6.20)/-	良好	内回り	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層(ドット)
19-35	9	RE1	(7.90)/-(18.4)	良好	内回り・窓付	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層(ドット)
19-36	9	RE1	(2.80)/(9.80)/-	良好	内回り	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層(ドット)
19-37	9	RE2	(1.71)/-(18.40)	良好	内回り・窓付	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層
19-38	9	RE16	(6.80)/-(17.4)	良好	内回り	近所/大規模	1棟第一体下部の残存。	上層
19-39	9	RE1	(3.81)/-(9.4)	良好	角店付	近所/大規模	1棟第一体下部の残存。	上層(ドット)
20-40-1	9	RE1	(11.11)/(6.20)/-	良好	内回り・行渡	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層
20-40-2	9	RE1	(16.4)/(21.1)	良好	角店付	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層(ドット)
20-40-3	9	RE1	(3.81)/-(9.4)	良好	角店付	近所/大規模	1棟第一体下部の残存。	上層
20-40-4	9	RE1	(6.20)/(11.30)/(17.80)/(15.6)	良好	角店付	近所/大規模	1棟第一体上部の残存。	上層(ドット)
21-41	10	RE1	49.60/20.7/11.6	良好	角店付	近所/大規模	70%残存。	上層(ドット)
21-42	10	RE1	42.2/28.1/10.7	良好	角店付・角付	近所/大規模	90%残存。	上層(ドット)

写真図版





1. 調査地点全景① (南東から)



2. 調査地点全景② (南西から)



1. SI01完艦状況① (南から)



2. SI01完艦状況② (南から)



3. SI01遺物出土状況①【全体】 (南から)



4. SI01遺物出土状況②【部分①】 (南東から)



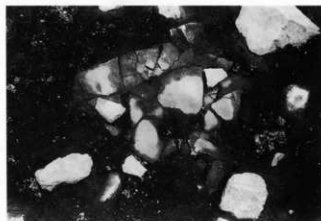
1. SIO1遺物出土状況③【部分②】(南東から)



2. SIO1遺物出土状況④【第17図25】(南西から)



3. SIO1遺物出土状況⑤【第20図40】(南から)



4. SIO1遺物出土状況⑥【第21図41】(西から)



5. SIO1遺物出土状況⑥【第24図51】(西から)



6. 1号配石完掘状況(西から)



7. 1号配石半截状況①(西から)



8. 1号配石半截状況②(西から)



1. 2号配石完盛状況 (南から)



2. 2号配石半載状況 (東から)



3. 1号石組完盛状況 (南から)



4. 1号石組半載状況① (南から)



5. 1号石組半載状況② (西から)



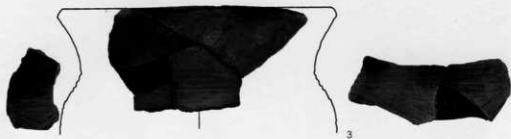
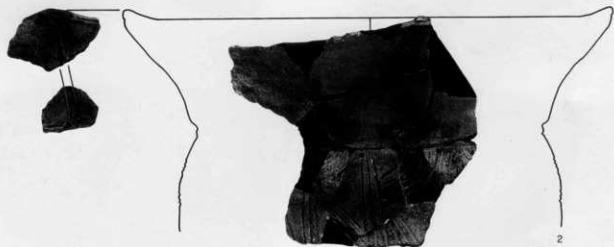
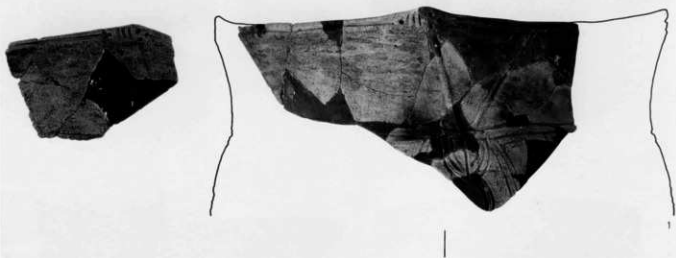
6. 発掘作業風景① (南東から)

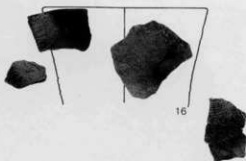
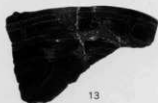


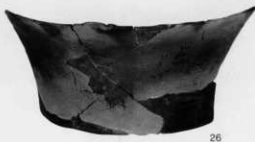
7. 発掘作業風景② (南から)



8. 発掘作業風景③ (南東から)









28



29a



29b



30



31



32



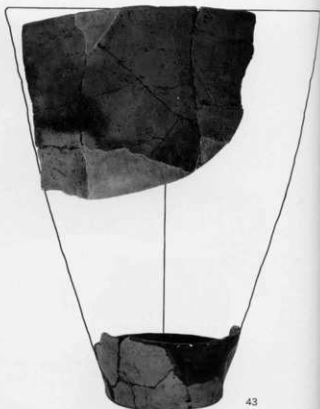
34



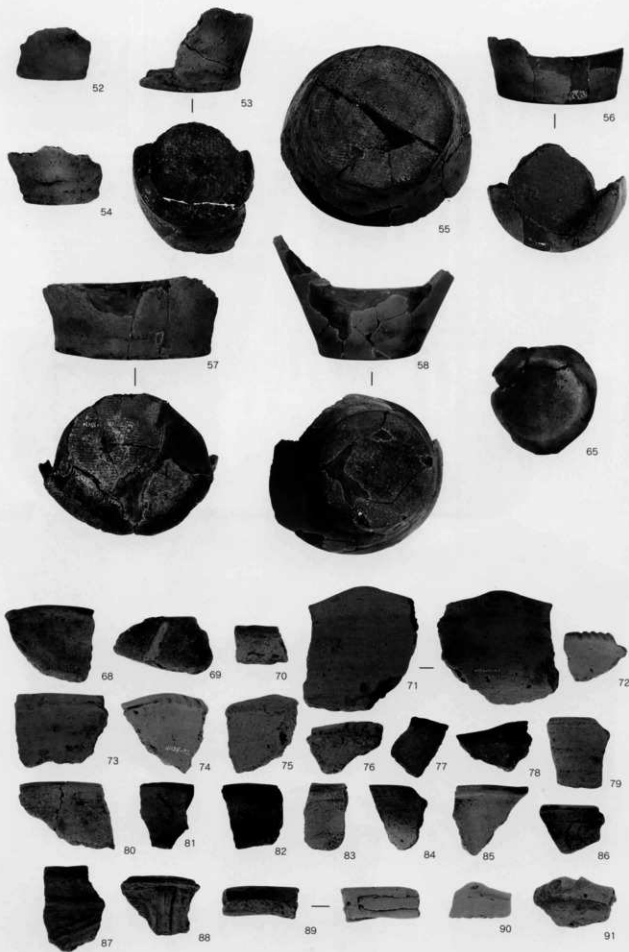
33

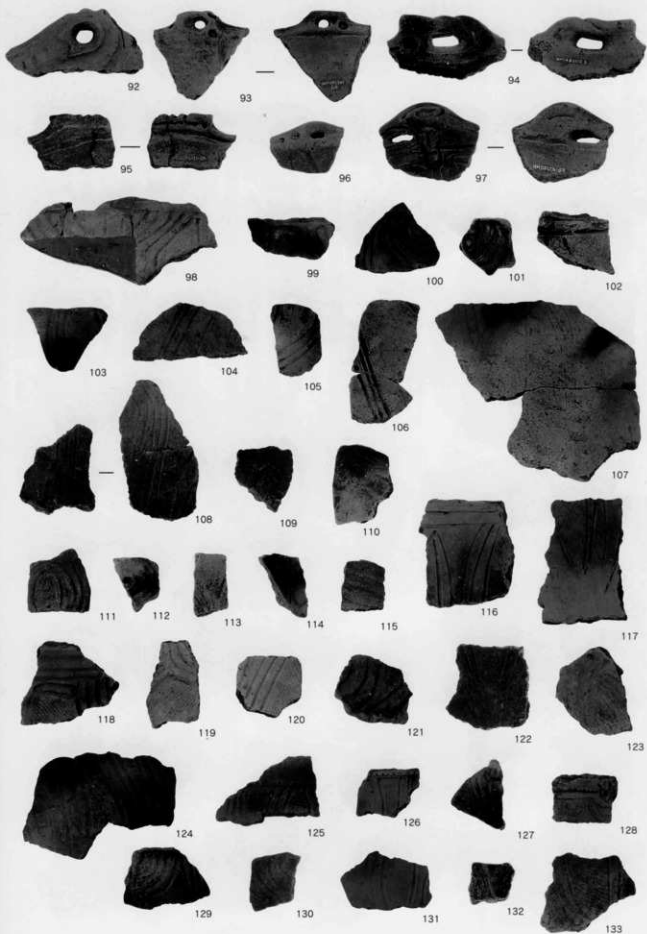


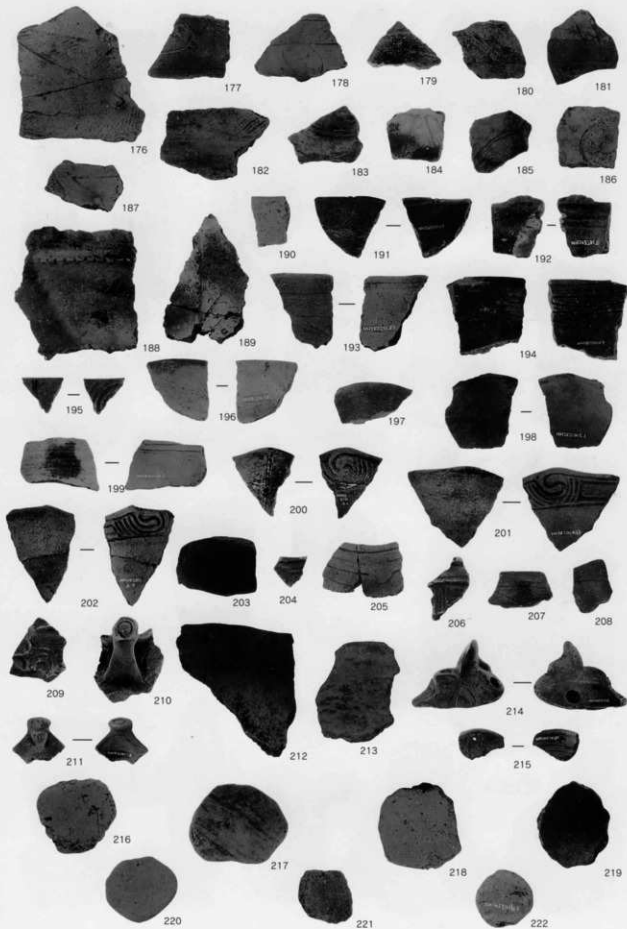


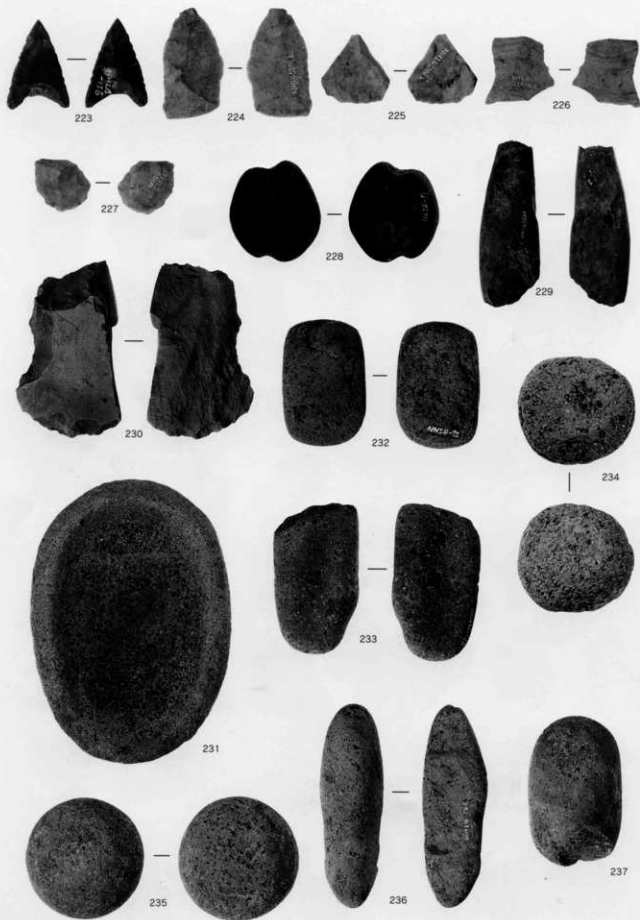






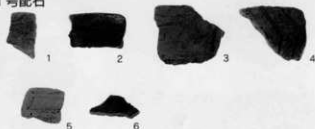




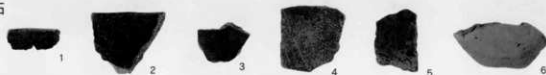




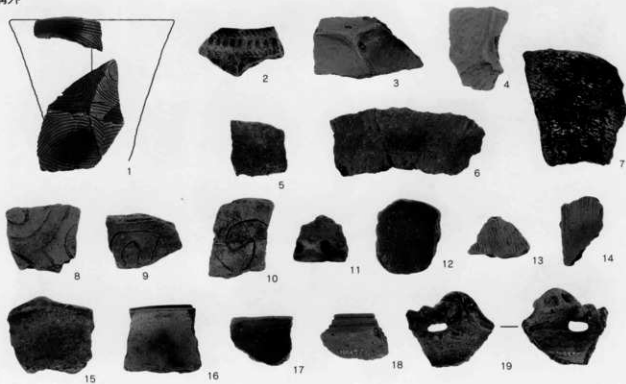
1号配石



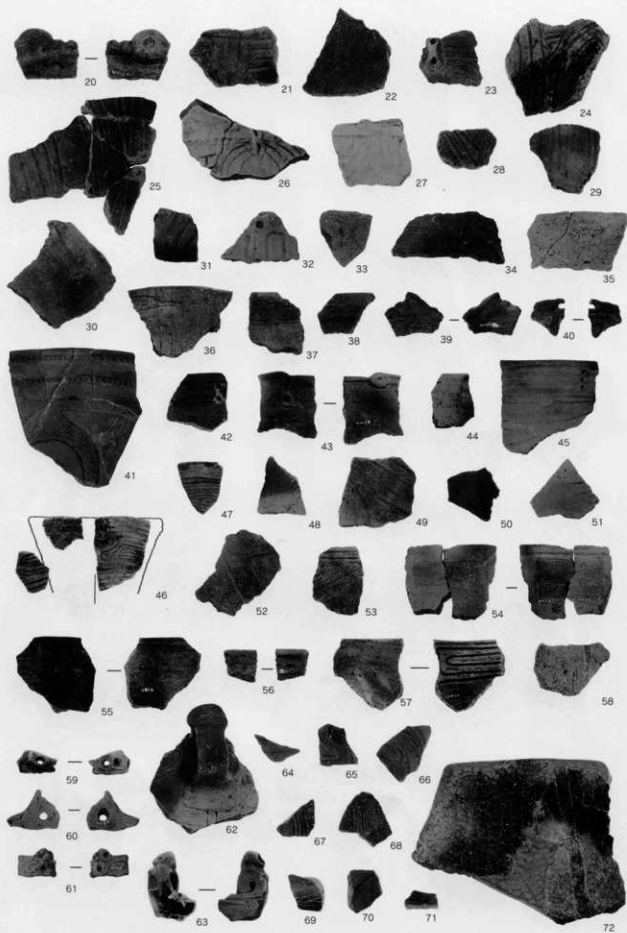
2号配石

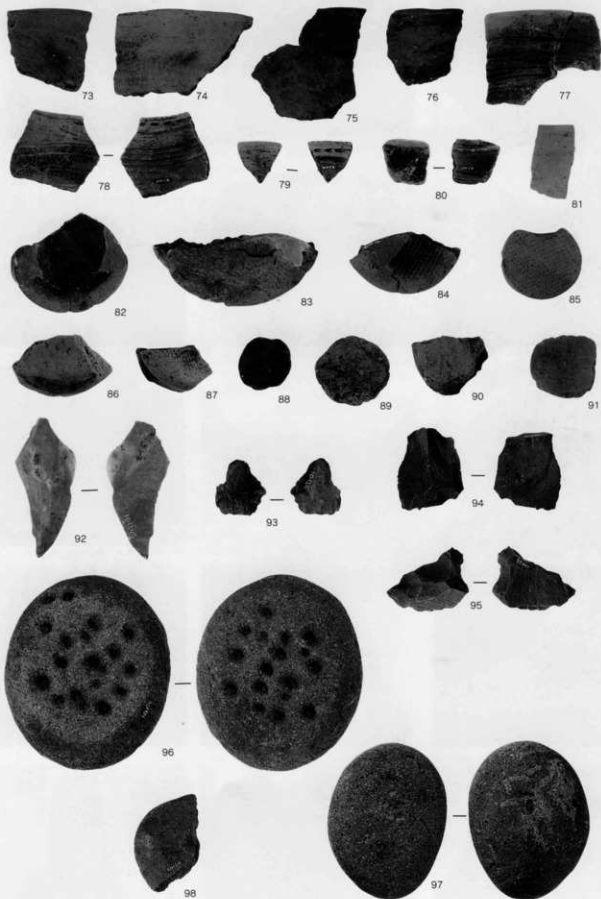


遺構外



遺構外出土遺物②





出土遺物拡大写真



第14図1



第14図2



第15図7



第15図8



第16図11



第16図14



第17図17



第17図20a



第17図20b



第17図21



第18図28



第19図32



第19図33



第19図34



第19図35

報告書抄録

ふりがな	はやしなかはらいちいせきよん							
書名	林中原Ⅰ遺跡Ⅳ							
副書名	個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町与喜屋174 TEL0279-82 4517/FAX0279-82-4519							
発行年月日	西暦2010年3月19日							
所取遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯 (世界測地系)	東 経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
林中原Ⅰ遺跡	群馬県吾妻郡長野原町大字林	10424	45	363230 (363241)	1384047 (1384035)	20030711 ～ 20030718	59.8	個人専用住宅
所取遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項
林中原Ⅰ遺跡	集 落 跡	縄文時代		住居跡 配石遺構 石組遺構	1軒 2基 1基	縄文土器・石器		堀之内Ⅱ式 ～加曾利BⅠ 式の住居内一 括廃棄
要 約	<p>本遺跡は吾妻川左岸の最上位段丘上の南向き緩斜面に位置する。標高は629m前後である。縄文時代後期前葉の竪穴式住居跡1軒、配石遺構2基、石組遺構1基が検出された。竪穴式住居跡は敷石が残っていることから柄鏡形敷石住居跡と考えられ、主体部の約半分の検出である。住居内覆土には大量の遺物がブロック状で出土し、いわゆる「土器捨て場」の様相を呈していた。配石遺構は確認面からの深さが一般的なものの範疇を超えており、掘立柱建物跡の可能性が高い。また石組遺構としたものは出土炭化材の放射性炭素年代測定により中期後半に帰属することが判明し、板石の組み方からも判断して炉跡の可能性が高く、調査区全体が中期後半の竪穴式住居跡であったことが推測された。遺物では住居内廃棄遺物に半完形遺物が多く、堀之内Ⅱ式中段階くらいの当該地域の特徴が把握される土器群である。その中でも釣手付き注口土器は類例に乏しく、貴重な発見であった。</p>							

林中原Ⅰ遺跡Ⅳ

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

平成 22 年 3 月 15 日 印刷

平成 22 年 3 月 19 日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒 377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋 174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社

『林中原 I 遺跡IV』正誤表

頁	行	誤	正
11	36	(宮原の誤植が- 筆者註)	(宮原の誤植か- 筆者註)
18	3	第4図のA地点	第5図のA地点
78	19	を第49図に示した。第49図1は	を第50図に示した。第50図1は
78	34	第49図6は	第50図6は
81	32	第3類は	第3群は





